2019-2020年度

横浜市
芸術創造特別支援事業
リーディング・プログラム

YokohamArtLife ヨコハマートライフ報告書

YokohamArtLife
2019-2020年の活動報告

本報告書は、2019年度～2020年度にかけて実施された横浜市の芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム“YokohamArtLife（以下YAL）”の成果をまとめたものです。YALは、「芸術・文化をもっと身近に、もっと気軽に」を目指し、地域の広場、公園や通路、図書館、商店街、商業施設、病院などに芸術活動を通じて市民やアーティストが集まり、思い思いの時間を過ごすことを実現しました。

第1部では「YokohamArtLifeの風景」と題し、芸術を通して横浜の各地で生まれた新たな風景についてご紹介します。今回、各地の活動を通じてあらためて横浜の多様性、住む人や自然の豊かさを発見する機会となりました。第2部では「YokohamArtLifeの挑戦」と題し、このプログラムの推進力となった「事業改善のためのコミュニケーションツールとしての評価」について詳しく解説します。

どのチームも新型コロナウイルスの影響を受けていますが、柔軟な対応をしつつ活動を続けられました。芸術が生活に必要不可欠なものであるならば、移動制限される状況において住まいの身近で体験できる芸術の存在は、ますます大切になります。芸術と社会がつながることで、どのような可能性が広がり、地域に影響を及ぼしたのか。2年間のYALを問い直すことで明らかにしていきます。

04 **第1部　YokohamArtLifeの風景**

06 企画概要・参加団体一覧

08 左近山アートフェスティバル！　（株）スタジオ・ゲンクマガイ（STGK Inc.）

10 PHOTO CABIN　NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル

12 YOKOHAMA AIR ACT　YOKOHAMA AIR ACT実行委員会

14 生きづらさを抱える子ども・若者とつくるミュージカルプロジェクト
M6 Musical ACT　NPO法人ヒューマンフェローシップ

16 テアトル図書館へようこそ！
みんなのまちの図書館が劇場に変身する！　（株）横浜メディアアド

18 数字で見るYokohamArtLifeの振り返り

20 **第2部　YokohamArtLifeの挑戦**

22 アーツマネジメントを「評価する」とは？　YokohamArtLifeインタビュー

24 何のために芸術文化活動を評価するのか？　中村美亜先生インタビュー

26 各プロジェクトの挑戦 —個別指標と振り返り —

- 26 左近山アートプロジェクト！の挑戦
- 28 PHOTO CABIN の挑戦
- 30 YOKOHAMA AIR ACT の挑戦
- 32 M6 Musical ACT の挑戦
- 34 テアトル図書館へようこそ！の挑戦

36 参加団体座談会インタビュー　わたしたちにとって評価とは何だったのか？

42 創造性をどのように可視化するのか　岡田猛先生による寄稿

44 岡田猛研究室による心理指標を用いた分析結果報告

46 YokohamArtLifeの仕組み

47 結び ～ YokohamArtLifeが開いた地域社会と芸術の可能性

48 実施スケジュール / 公募概要

50 各プロジェクトの主催・共催・協力等

金沢区 YOKOHAMA AIR ACT 猫の小林さんとあそぼう！プロジェクト 飯川雄大《デコレータークラブ－ピンクの猫の小林さん－》2019年度 撮影：阪中隆文

第１部
YokohamArtLifeの風景

都市・横浜は、近代以降に発展した異国情緒あふれる港町の姿として知られますが、近世以前に栄え古墳や宿場町といった旧跡が残る各地域もまた魅力的です。今や郊外となったそれらの地域には、鉄道が走り、住宅が立ち並び、森や川、広々とした公園など自然が豊かで四季折々の風景があります。YokohamArtLife（YAL）は、こうした横浜の環境を生かして実施し、多様な人々と共に芸術体験を深めていくことを試みました。

1960年代後半に開発され現在は高齢化が進む旭区左近山団地に新たに生まれた芸術祭とギャラリー。1970年代からの埋立事業で生まれた金沢区並木で開催されたアートプロジェクト。トラックを写真暗室に改造して市内の広場や公園、商業施設を巡り行われた写真体験ワークショップ。不登校・ひきこもりを含む子どもたちと作られ多くの人が訪れる場所で発表されたミュージカル。横浜の各地の図書館を舞台に上演された音楽劇。これらは、横浜の歴史や環境、そこに暮らす人と共に新たな風景を描き出しています。

この会場となった地域の人が日ごろ愛し足を運ぶ場所を、YALでは「地域ランドマーク」と呼びます。ここで芸術を展開することで芸術は地域の人により身近となり、また地域の人は芸術を通じて人と交流し、場の価値をあらためて感じることができます。こうして場と芸術の相互作用が、地域社会の可能性を広げています。

2019-2020年度の支援プロジェクト

左近山アートフェスティバル！

株式会社 スタジオ・ゲンクマガイ（STGK Inc.）

左近山団地全域および店舗とオンラインを利用し、団地住民と近隣住民を対象に、コロナ発生以降の状況に対応した「団地とアートが出会う新しいあり方を模索したプログラム」を実施。拠点でのアート展示やアート活動の配信、左近山を散歩しながらアートを楽しめる回遊型のフェスティバル等を継続的に行っている。

PHOTO CABIN

NPO法人 ザ・ダークルーム・インターナショナル

暗室・ギャラリー・巨大ピンホールカメラの３つの機能を持たせたトラック「PHOTO CABIN」が、横浜の様々な地域をめぐるプロジェクト。郊外の公園や動物園、商業施設等で、シニアや子育て世代等を対象に、写真の原理を生かした様々なフォトアート体験を配達。

YOKOHAMA AIR ACT

YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会

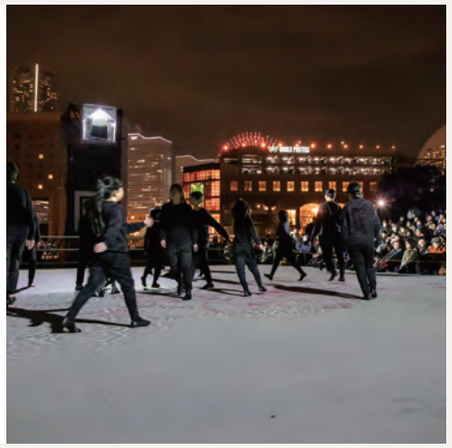
金沢シーサイドタウンを舞台に、人々が日常生活の延長線上でアートやアーティストに出会う機会を生み出すプロジェクト。2 年間で 4 組のアーティストが参加し、地域の人たちと関わりながら制作した作品を屋外展示した。

生きづらさを抱える子ども・若者とつくる
ミュージカルプロジェクト

M6 Musical ACT

NPO法人 ヒューマンフェローシップ

不登校・ひきこもりなどの生きづらさを抱えた子ども・若者が、磯子区・Negishi M6 にて、プロのアーティストを講師に迎え、毎週レッスンに取り組んで一つのミュージカルを作り上げた。12 月には、その成果を大きな舞台で発表。課題を抱えた若者たちとアーティスト、地域をつないでいくプロジェクト。



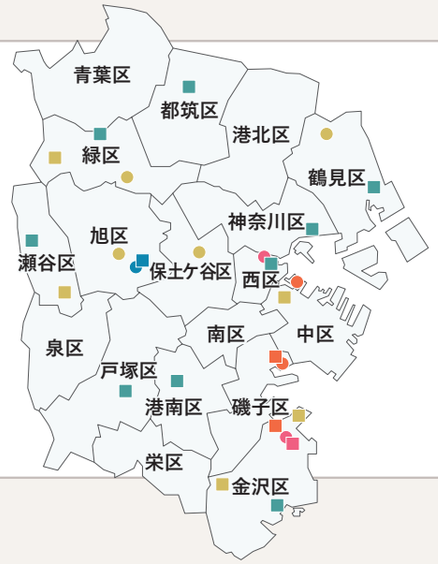
テアトル図書館へようこそ！

みんなのまちの図書館が劇場に変身する！

神奈川区民文化センター指定管理者代表構成団体
株式会社 横浜メディアアド

市民にとって身近な公立施設である市内各区の図書館を会場に、プロの舞台俳優２名と打楽器奏者１名が木村裕一作「あらしのよるに」を上演。観覧者も自分の体を使って、森や嵐、草がそよぐ音を表現しながら作品に参加。いつもの図書館が劇場になる“ テアトル図書館 ”。

※ 2020年度のみの支援プロジェクト



横浜市内の開催場所

● 2019年度　■ 2020年度

- 左近山アートフェスティバル！
- PHOTO CABIN
- YOKOHAMA AIR ACT
- M6 Musical ACT
- テアトル図書館へようこそ！

株式会社スタジオ・ゲンクマガイ（STGK Inc.）　実施 2019/ 2020年度

左近山アートフェスティバル！

少子・高齢化のすすむ左近山団地に、アートが日常にある暮らしを

「毎日アートと触れ合うことができる環境」を目的に、少子高齢化の進む旭区左近山団地にて、文化的活動のサポート、多世代の交流、団地の新しい価値の創出を目指した。19年度の「左近山アートフェスティバル！」では「みんなのにわ」にて参加アーティスト 37 組による様々なアート展示、ワークショップやライブイベントを開催、「左近山アトリエ 131110」（以下、アトリエ）では、日常的にアーティストの展覧会、ワークショップ、カフェ等、場の提供が行われた。20年度、新型コロナウィルスの中でも人々が交流・活動する機会を創出するため、19年度の内容をさらに発展させて開催した「左近山散歩フェスティバル！」では、アーティスト達による散歩を楽しむ様々な仕掛けを随所に配置。アトリエでは、オンラインを活用したワークショップの開催や、「左近山チャンネル！」（配信プログラム）で、左近山団地やアトリエの取組などを広く発信して、新型コロナウィルス発生以降の状況に対応したプログラムを実施した。

旭区 左近山散歩フェスティバル！ 2020年度 撮影：菅原康太

1. 旭区 左近山アートフェスティバル！ 2019年度 撮影：菅原康太 / 2. 旭区 左近山アトリエ 131110 2020年度 撮影：STGK Inc. / 3. 旭区 左近山散歩フェスティバル！ 2020年度 撮影：菅原康太 / 4. 旭区 左近山アトリエ 131110 2020年度　撮影：STGK Inc.

開催情報

2019年度	左近山アートフェスティバル！（旭区）11/30 左近山アトリエ 131110（旭区）12/7 より開設～ 3/27 ※月・木定休日、年末年始休業、3/1 ～ 15 感染予防対策休業除く
2020年度	左近山散歩フェスティバル！（旭区）11/3 左近山アトリエ 131110（旭区）6/5 ～ ※月・木定休日、年末年始休業、4/1 ～ 6/4 感染予防対策休業除く

プロジェクトの問い

個人の多様な価値観を引き出すための場づくりとは？

団地の中は、住空間、年齢構成などが似ており、学校や買い物など生活圏が同じです。このことは均質的な価値観を生み出しがちで、それが苦手と感じる人もいます。そこで住民一人一人が持っている多様な価値感を引き出せるような場づくりをおこなったら、もっと団地住まいが面白くなるのでは？と考えました。その核となるのが「アート」で、町の外からくるアーティストにも協力いただいておりますが、この場では住んでいる人の思い、誰もが持っている表現したい気持ちを大切にしながら場の運営をしています。

2020年は、残念ながら新型コロナウィルスの影響で 3 月からアトリエでの活動は一時休止しました。でも、その間に人々が緑豊かな左近山を散歩することで気を晴らしていることに気づいたのです。同じ道を歩いていても、世代ごとに見ている世界は異なります。そこで散歩をしながら認知が変わるようなきっかけをアートで作れないかと考え、コロナ禍でもソーシャルディスタンスを保ちながら開催可能な「左近山散歩フェスティバル！」を企画。団地の価値ある未来の一幕を描けたかもしれないと思っています。

多様なものが集積し人と文化が集まって街ができます。もし、そこでアートが多様性を生み出す補助線となるならば、STGK が表現するランドスケープデザインに対してもフィードバックが拓けるかもしれません。プロジェクトを通して「多様な価値観を包摂する左近山の未来のためにアートに何ができるのか？」この問いの答えを探して試行錯誤を続けています。

＊本稿は、株式会社スタジオ･ゲンクマガイ（STGK Inc.）代表･ 熊谷玄さんへのインタビューを元に事務局で執筆したものです。

NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル　実施 2019/ 2020年度

PHOTO CABIN

「写真」を体験 / 体感する移動型暗室 PHOTO CABIN が自分のまちに

暗室・ギャラリー・巨大ピンホールカメラの 3 つの機能を持たせたトラック「PHOTO CABIN」が、横浜の様々な（郊外部）地域をめぐるプロジェクト。19 年度は、「PHOTO CABIN」に乗り込んでカメラの原理であるカメラオブスクラを体感したり、暗室体験ができるワークショップや、プロの機材で撮る / 撮られるを体験できるフォトセッションを実施。20 年度は、広い部屋を丸ごとカメラオブスクラにしたり、制作キットによるカメラオブスクラ体験やフォトセッションを行ったりしたほか、SNS を活用して、自宅をカメラオブスクラに変えるハウツー動画の配信や SNS への撮影写真の投稿などワークショップ後に日常に写真を取り込んでもらうことを狙った施策を実施した。20年度のフォトセッションで撮影された写真や SNS に投稿された写真は、2021年 2 月、一堂にまとめて展示を行った。

金沢区 PHOTO CABIN 2020年度 撮影：NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル

1. 瀬谷区 PHOTO CABIN 2020年度 / 2. 金沢区 PHOTO CABIN 2020年度 / 3. 緑区 PHOTO CABIN 2020年度 / 4. 金沢区 PHOTO CABIN 2020年度 撮影：NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル

開催情報

2019年度	神奈川県立保土ケ谷公園（保土ケ谷区）11/4、17、12/8、1/21 左近山団地みんなのにわ（旭区）11/30 神奈川県立四季の森公園（緑区）12/1、14、1/11、25 神奈川県立三ツ池公園　（鶴見区）12/7、15、1/12
2020年度	横浜市役所（中区）11/21、22 三井アウトレットパーク横浜ベイサイド（金沢区）11/29、12/12 横浜市立金沢動物園（金沢区）12/6 玄海田公園（緑区）12/19 オーガスタミルクファーム（瀬谷区）12/20 三井アウトレットパーク横浜ベイサイド 写真展（金沢区）2/14 ～ 28

プロジェクトの問い

写真文化を育てるにはどうすればいいか？

ザ・ダークルーム・インターナショナルは、写真文化を育て広めるために、写真をきっかけとした仲間づくり、写真表現を深める動機づくり、結果としての写真にとどまらないコミュニティづくりを目指しています。写真文化は「写真」というモノだけでは成り立ちません。撮影、現像、写真を見せ合い語り合うこと、その生きた実践が写真文化となります。

暗室は写真がコミュニティとして生きている場所の一つです。アメリカでは、プロカメラマン、アーティストたちが一つの大きな暗室でそれぞれの作業を行う中で、互いにつながり、関係や協働プロジェクトが広がっていく様子をみました。イギリスの貸し暗室では、一般客が日常的に利用し、写真を現像する場だけでない、コミュニケーションの場としての暗室がありました。

日本でも暗室や写真体験を通したコミュニティを作り上げていきたいと思い、20 年前に貸し暗室から活動を始め、その 5 年後には NPO 法人となり、小・中・高で写真授業を行ったり、企業とのイベントを通して、写真を介したコミュニティを生み出し、写真文化を活性化させる働きかけなども行ったりしています。

でも、当方の暗室は中区野毛にあり、横浜の各区に住む人が身近に訪れることができるわけではありません。暗室でユニークな出会いが生まれるのがわかっているのなら、自分たちが出かけていこうと、今回の「移動型暗室 PHOTO CABIN」に取組みました。改めて、今回、写真に触れることで人々の五感が刺激され想像力が豊かになっていくこと、また人や地域の新しい接点が増えていくことを実感しています。

＊本稿は、NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル理事長・近藤宏光さんへのインタビューを元に事務局で執筆したものです。

YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会　実施 2019 / 2020年度

YOKOHAMA AIR ACT

BankART School 出張編 / 猫の小林さんとあそぼう！プロジェクト
ナミキアートプラス ー並木のパブリックアートプロジェクトー

日常生活の延長線上で、アートに出会うまちに

アーティストやアートが媒介となり、横浜市民誰もが日常の中で文化芸術や創造性を体感することができる機会をつくるプロジェクト。19年度は金沢区とみなとみらいの都市開発の歴史をテーマにした連続講座「BankART School 出張編」と、金沢シーサイドタウンを舞台にしたアートプロジェクト「猫の小林さんとあそぼう！プロジェクト」を企画し、飯川雄大のアート作品「ピンクの猫の小林さん」の盆栽ワークショップと、屋外作品の展示を行った。20年度はアートを通して金沢シーサイドタウンのまちの魅力を再発見し、地域内外へ発信していくことを目的としたプロジェクト「ナミキアートプラス」を展開。パブリックアートとまちあるきのプログラムを実施し、3組のアーティストが参加した。パブリックアートのプログラムでは、団地に滞在して地域住民と交流しながら街の歴史や風景を取り込んだキム・ガウンの作品と、地域の人たちが自宅や店内で飾っているコレクションをまるで展覧会予告のようなバナー（旗）にして見せる池田光宏の作品を街中に点在させた。まちあるきのプログラムでは、いつもと違った視点でまちを歩くorangcosongの作品「冒険の書」を配布した。

金沢区 YOKOHAMA AIR ACT ナミキアートプラス キム・ガウン《願う》並木十二天公園 2020年度 撮影：笠木靖之

1. 金沢区 YOKOHAMA AIR ACT ナミキアートプラス 池田光宏《BGA プロジェクト－横浜･並木のアートシーン－》金沢センターシーサイド 2020年度 撮影：川瀬一絵 / 2. 金沢区 YOKOHAMA AIR ACT BankART School 出張編 開催風景 2019年度 / 3. 金沢区 YOKOHAMA AIR ACT ナミキアートプラス orangcosong『演劇クエスト－白昼のバスケット冒険団とふしぎな依頼人たち－』2020年度　撮影：笠木靖之 / 4. 金沢区 YOKOHAMA AIR ACT 猫の小林さんとあそぼう！プロジェクト 飯川雄大《デコレータークラブ－ピンクの猫の小林さん－》並木クリニック 2019年度 撮影：阪中隆文

開催情報

2019年度　BankART school 出張編（中区・金沢区）
11/20、11/30、12/19、1/11、1/25
猫の小林さんとあそぼう！プロジェクト ワークショップ（金沢区）12/8
猫の小林さんとあそぼう！プロジェクト 作品展示（金沢区）1/31 ～

2020年度　ナミキアートプラス 滞在制作（金沢区）12/15 ～ 2/15
ナミキアートプラス 作品展示（金沢区）1/16 ～ 31

プロジェクトの問い

アーティストがいることで、まちは変わるのか？

ナミキアートプラスは、日常の中で人々がアート作品と出会うことで街にどのような変化がもたらされるのかを考えるプロジェクトです。1970年代に始まった「横浜市六大事業」によって開発されたみなとみらい地区（都心部）と金沢区（郊外部）のつながりを学び直し、アーティストの活動やアートによるまちづくりを市内に広げていくことを目指して活動しています。

19年度はクリニックにピンク色の巨大な猫のオブジェを設置しました。突然のことだったので、「何の目的でやっているの？」と聞かれることもありましたし、目にした人の多くは訳がわからなかったと思います。街を歩く中で偶然作品に出会う人は、作品を鑑賞することが目的ではありません。でも、立ち止まった人々が作品を前に言葉を交わす様子をみて、アート作品が異なる背景を持つ人々の出会いの場になっていると感じました。20年度は、この流れを汲みながら、アーティストが並木に滞在し、制作風景を公開する期間を設けたり、商店街の中にインフォメーションブースをつくり、スタッフやアーティストが通りかかった人に活動を説明したことで、さらに多くの出会いや対話が生まれました。

地域の神事を題材にした作品や、地域の方と一緒につくる作品もあり、アートをより身近に感じることができる機会になったのではないでしょうか。小学生たちが校内でこのプロジェクトを積極的に宣伝してくれたり、地域の方々から「作品を残したい」との声が生まれたりと、街が変化していく様子を実感することができました。また、アーティストにとっても新しい表現や挑戦が生まれたように感じています。

＊本稿は、YOKOHAMA AIR ACT実行委員会の立石沙織さん、北野翔平さんへのインタビューを元に事務局で執筆したものです。

NPO法人ヒューマンフェローシップ　実施 2019 / 2020年度

M6 Musical ACT

生きづらさを抱える子ども・若者とつくるミュージカルプロジェクト

未知なる経験の中で、自己表現の場を持ち、社会へつながるきっかけに

不登校･ひきこもりなどの生きづらさを抱えた子ども･若者が、ミュージカルの参加型創作ワークショップとレッスンをプロのアーティストとともに実施。19 年度は磯子区にて 9 月～ 12 月にワークショップ 形式の練習を週 3 回行い、12 月 21 日に中区の新港中央広場、22 日に磯子区 LiveboxM6 で発表会を行った。実施演目は『ジーザスクライスト スーパースター』。2 年目の 20 年度は､6 月から同様にレッスンを開始し、参加者は実際に M6 に集まって歌唱･ダンスのレッスンをする他、オンラインでの参加･見学も積極的に受け入れ、取り組めそうだったら本格的に参加するという形も可能とした。歌唱やダンスで参加したくない人には、映像制作や裏方の仕事で参加してもらう仕組みも準備した。12 月 19 日にブランチ南部市場にて『美女と野獣ハイライト版』を屋外上演。生きづらさを感じる若者と子どもたちに、ミュージカル体験を通して社会との関わり方を再発見してもらうこと、そしてそういった若者たちに対する理解者・支援者を増やし、若者を支える地域形成を目指す。

中区 M6 Musical ACT 発表風景（NIGHT SYNC YOKOHAMA）2019年度

1.磯子区 M6 Musical ACT 練習風景 2019年度 / 2.磯子区 M6 Musical ACT 練習風景 2020年度 / 3. 金沢区 M6 Musical ACT 発表風景（ブランチ南部市場）2020年度 / 4. 金沢区 M6 Musical ACT 発表風景（ブランチ南部市場）2020年度

開催情報

2019年度	LiveboxM6 練習（磯子区）9 月～ 12 月 NIGHT SYNC YOKOHAMA 発表会 (中区)12/21 LiveboxM6 発表会（磯子区）12/22
2020年度	LiveboxM6 練習（磯子区）7 月～ 12 月 映像制作ワークショップ LiveboxM6（磯子区） 11/16、25、12/2、9、11、16、19 ブランチ南部市場 発表会（金沢区）12/19

プロジェクトの問い

福祉としての芸術表現とは？

ヒューマンフェローシップは、設立当初から課題を抱えた若者たちの支援に取り組む中で、自分の表現や人との関わりに苦手意識を持っている若者が、体を動かしたり歌を歌ったり、同じ課題や目的を持った他人と関わる事で、様々な発見や変化があることに、若者たち自身が気づくようになる様子を見てきました。

私たちが支援をしている若者たちは、学校や会社、時間や年月といった色んな社会の枠組みから取り残されています。そこで、発表という目標を立て、リズムを取り戻しながら、一つの演劇をコミュニケーションを通じみんなで作り上げる活動を目指します。勉強や仕事ではない経験で自分の価値観を互いに共有し、ときにぶつかり合いときに褒め合うコミュニケーションを通じて、それぞれの価値ある経験が生まれる場づくりを心がけています。

これからの活動としては、こうした福祉としての芸術表現の活動に加え、芸術の現場のパフォーマーにより深く関わってもらい、実際の芸術制作の空気を参加者に味わってもらいたいと考えています。芸術家の方との共通言語の獲得や目的の共有という課題を見据えながら、芸術と福祉の融合を目指して活動していきます。

＊本稿は、NPO法人ヒューマンフェローシップの岩本真実さん、金伽耶さんへのインタビューを元に事務局で執筆したものです。

株式会社横浜メディアアド　実施 2020年度

テアトル図書館へようこそ！

みんなのまちの図書館が劇場に変身する！

いつもの図書館が、劇場に変身する！

市民にとって身近な公立施設である市内各区の図書館を会場に、打楽器奏者 1 名とプロの舞台俳優 2 名が、木村裕一作『あらしのよるに』『あるはれたひに』（講談社刊）の抜粋版を上演。参加者は、自分の体をこすったり、床を踏み鳴らしたりすることで、森や嵐の音、草がそよぐ音などを表現して、作品に参加してもらう。造形作家の玉田多紀が制作した段ボールによる動物のかぶり物も会場に展示された。神奈川区、金沢区、港南区、瀬谷区、都筑区、鶴見区、戸塚区、西区、緑区の 9 区で行われた。図書館という生活に身近な場で芸術体験が味わえる。出演：會田瑞樹（ヴィブラフォン）・伊原農、枝元萌、はざまみゆき（劇団ハイリンド）/ 演奏助手：櫻井音斗・中村賢太郎 / 構成・演出：齊藤実雪（かなっくホール）/ 美術：玉田多紀（造形作家）/ 宣伝美術：イワタアスカ / 記録：柏木俊彦（文章）・今井美佐穂（文章）・齊藤史緒（文章）・太田功二（写真）・造影乃（動画）/ 照明：猿田和則

港南区 テアトル図書館へようこそ！（港南図書館）2020年度 撮影：おおたこうじ

1. 神奈川区 テアトル図書館へようこそ！（神奈川図書館）2020年度 / 2. 戸塚区 テアトル図書館へようこそ！（戸塚図書館）2020年度 / 3. 緑区 テアトル図書館へようこそ！（緑図書館）2020年度 / 4. 瀬谷区　テアトル図書館へようこそ！（瀬谷図書館）2020年度 撮影：おおたこうじ

開催情報

2020年度	緑図書館（緑区）12/5	中央図書館（西区）1/31
	戸塚図書館（戸塚区）12/18	瀬谷図書館（瀬谷区）2/11
	鶴見図書館（鶴見区）12/25*	都筑図書館（都筑区）2/14
	港南図書館（港南区）1/24	金沢図書館（金沢区）2/27
	神奈川図書館（神奈川区 ）1/30	
	*2 回公演	

プロジェクトの問い

劇場ではないからこそ深められる芸術体験とは？

かなっくホール（神奈川区民文化センター）は、これまで、神奈川・中央図書館で出張（アウトリーチ）演劇プログラムを実施してきました。図書館を舞台に選んだのは、図書館は市民の身近に存在し、たくさんの人が来られる出入り自由な開かれた場所だからです。でも、参加者の中には区民文化センターは、行ったことがないという方もあり、図書館での活動は、多くの方に自分たちの事を知ってもらう良い機会でした。

「テアトル図書館」を実践してみて、知ってもらうこと以外にも意味があることが分かりました。一つは図書館をさらに開かれた場へと変えていけること。もう一つは、芸術体験を深めることです。これまで私は、かなっくホール以外の活動でも芸術アウトリーチ活動を多く行ってきた経験から、アウトリーチには劇場とは異なる体験があることを実感しています。

今回「あらしのよるに」の音楽劇では、図書館という身近な場所を劇場に変えるため、参加者の方に、上演前のワークショップで劇中の効果音を考えてもらい、劇中で自分の体を使って効果音を表現し、演劇に参加してもらいました。そうすることで、図書館のカウンターの前でも、劇中の風景を想像しやすくなるのです。劇場では機材などがあり表現を実現しやすい。でも、図書館ではそうはなりません。その制約が新たな表現を生み、新たな表現が観客の想像力を掻き立てるのです。芸術と図書館のような公共空間に新たなつながりを作ることで、人々が芸術にアクセスするときの選択肢が増え、個々人それぞれの芸術体験を生み出すための環境づくりが進んでいくのではないかと期待しています。

＊本稿は、かなっくホールプロデューサー・齊藤実雪さんへのインタビューを元に事務局で執筆したものです。

数字で見るYokohamArtLifeの振り返り

開催区は2020年度採択段階において18区の予定でしたが、新型コロナウイルスの影響もあり、全区開催できませんでした。結果として、開催区は2年度あわせて市内13区となり、各活動に多くの市民が参加しています。実施に際して、共催、協力団体を獲得したところもあり、地域に根ざす活動へ発展していることが見えます。

申請件数

	申請件数	一次審査通過件数	採択件数
2019年度	29 件	10 件	4 件
2020年度	12 件	10 件	5 件

※原則2年以上の継続を見据えたプロジェクトであるため、2年目となる2020年度は継続事業4件を採択。1年計画の事業を新規募集し、1件採択した。

採択金額（単位：万円）

	2019年度	2020年度
STGK Inc.	1,500	600
ザ・ダークルーム・インターナショナル	700	600
YOKOHAMA AIR ACT実行委員会	500	750
ヒューマンフェローシップ	500	750
株式会社横浜メディアアド	-	500

開催区

2019年度	金沢区、磯子区、中区、保土ヶ谷区、緑区、旭区、西区、鶴見区	全 8 区
2020年度	旭区、磯子区、神奈川区、金沢区、港南区、瀬谷区、都筑区、鶴見区、戸塚区、中区、西区、緑区	全 12 区

参加者数

2019年度	4,905 名
2020年度	7,335 名

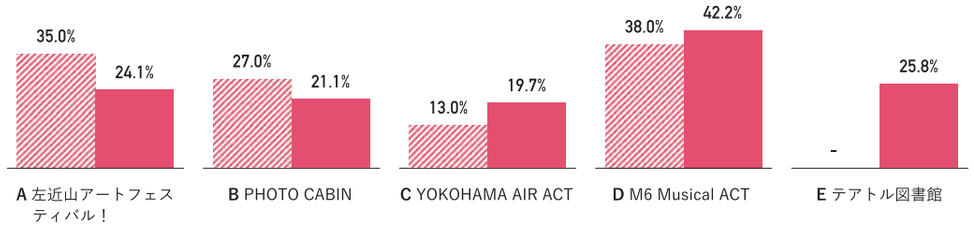
共催・協力団体

	共催団体	協力団体
2019年度	- 件	15 件
2020年度	4 件	18 件

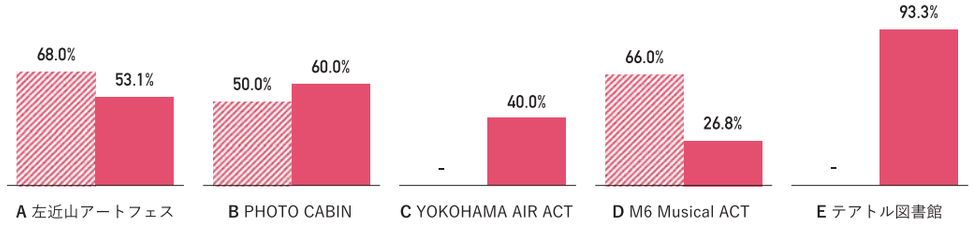
全活動で調査した共通アンケートからの抜粋

2019年度　2020年度

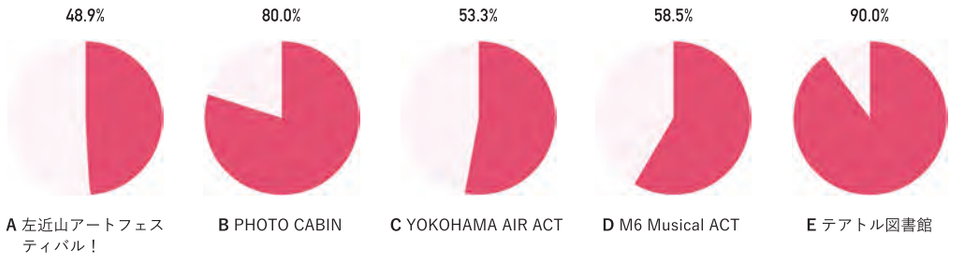
1. 回答者のうち「普段芸術文化活動に触れる機会が少ない*」と回答した人の割合



2. 1のうち、「今後芸術文化に関わる活動にもっと参加したい」と回答した人の割合



3. 1のうち、「美術館や図書館、劇場に行きたくなった」と回答した人の割合（2020年度のみ）



B、Eを見ると「普段芸術文化活動に触れる機会が少ない方にとって、次への参加意欲が高い」のは、鑑賞型より双方向型、参加型のプログラムで、同分野の経験豊富なディレクターによるものとわかる。また、触れる機会が少ないとする回答について、2年間同じエリアで実施しているもので数値の増減を見ると、Aは通年の活動があるので前年を経て体験者が増え、未体験は減った。またCは作品の会場を点から面に広げたことで未体験の参加者が増えたと仮説できる。こうして見ると芸術文化体験を地域に広げるには、プログラムの内容、経験と改善による質の向上、場や会場の設定、継続性が重要と考えられる。

*設問「日頃、どのくらいの頻度で音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりしますか」に対して、「今回が初めて」もしくは「年に1回程度」と回答した人の割合

旭区 左近山散歩フェスティバル！ 2020年度 撮影：菅原康太

第 2 部
YokohamArtLifeの挑戦

YokohamArtLife（YAL）は、「芸術文化をもっと身近に、もっと気軽に」を合言葉に各地で芸術体験の機会を増やすため、第 1 部で紹介した採択団体と協働を行ってきました。この推進力となったのが、「セオリー」を評価する制度です。まず、YAL は採択団体にセオリーの構築を依頼しました。次に採択団体が、①公募段階で活動が地域や社会に与える影響（アウトカム）を予測して「目的」「評価」「活動」を提案 / ②準備段階（プロセス）で事務局と共に「目的」「評価」を議論し評価指標を作成 / ③実施段階（アウトプット）で「活動」「変化」を検証します。YAL と採択団体の計画と評価を循環させることで施策の効果向上を狙いました。

ここでの評価は、「事業改善のためのコミュニケーションツール」で、事務局と採択団体の対話を促すもの、また採択団体とアーティストや参加者、関係者との対話を促すものとして位置づけています。事務局と採択団体は、外部の専門家に協力していただきながら、YAL の関係者会議を通じて、共通指標（全体で定めた評価の視点）と個別指標（プロジェクトごとに定めた評価の視点）を開発、現場でそれに基づいたアンケートを重ね、データの蓄積や分析を行ってきました。

第 2 部では、この YAL の「評価」における挑戦を紐解きます。セオリーを重視した制度は、各活動や地域の変化に繋がっているのか、また新たな芸術や表現を生み出す一助となったのか、当事者の声を交えて検証していきます。

YokohamArtLife Interview

アーツマネジメントを「評価する」とは？

YokohamArtLifeの取り組みがどのように生まれたのか、横浜市芸術文化振興財団の担当者に話を聞きました。

話：杉崎栄介
（公財）横浜市芸術文化振興財団 広報・ACYグループ

どうしたら芸術体験の格差をなくせるか？

— YokohamArtLifeが始まった経緯を教えてください。

YokohamArtLife は、私たち横浜市芸術文化振興財団と横浜市文化観光局が行う公募事業名称で、主に芸術活動への資金提供、評価の支援、広報支援を行っています。最初に横浜市より「ラグビーワールドカップとオリンピック・パラリンピックの盛り上がりにつながる形で、横浜から世界に芸術文化を発信する」というお題をいただきました。
しかし、まず横浜に住む人々が熱を持って芸術活動に参加していなければ、世界に相手されないのでないかと考えました。そのためには、横浜各地で芸術文化がもっと身近で気軽にある方が良い。さらに言うと、住まいの近場で「見るだけ」の文化プログラムではなく、「自分達で作る」文化プログラムが必要になります。そこで私たちは、「どのようにしたら、芸術文化活動体験の格差をなくしていくことができるか？」という問いを立て、そこから YokohamArtLife の制度を設計していきました。
芸術へのアクセスが容易な方と、経済や情報の格差や生活環境の問題でそれが容易ではない方がいます。とりわけ横浜各地から都心部の文化施設への移動距離が課題です。また物理的な障壁に加えて、芸術への関心の低さといった精神的な障壁もあります。そこでまずはそれらを取り除こうと住まいの身近な場所と空間を「地域ランドマーク」と名付けて、そこを舞台とすることをプロジェクト実施の条件としました。芸術が地域のコモンズで展開されることで、芸術の可能性、場の可能性の双方が顕在化するという仮説を立てたのです。

— その制度にはどのような特徴がありますか？

日本では初めてだと思いますが、実現のために成果可視先行型の助成制度をやってみようとなりました。ソーシャルインパクトを研究されている落合千華さんにもご協力いただいて、公募要項を作りました。

これまでの文化行政がおこなう公募型事業だと、多くの場合は目的が抽象的であったり、集客やアーティストの実績や認知度といった分かりやすい指標を立てたりと、アーツマネジメントに対する評価を深堀りできていません。そして、それに応募する団体は「何かのため」ではなく、「何をやりたいか」から申請をする傾向にあります。これでは行政と芸術団体の間で評価の軸がズレたままになり、文化的価値は十分にあるものの、社会的な影響力を持てず、結果として市民が文化行政に関心をもたなくなる恐れがあります。
そうなると、行政側も応募側も申請から報告まで自分たちの望んでいたことと成果のギャップに苦むことになり、評価に熱心に取り組めず、行政側にも申請側にも中長期的に汎用可能なデータが十分に集まらないという結果になってしまいます。

そこで、行政側と応募団体側、双方の課題を同時に解決すること目指して、両者が組んで大きな「評価のサイクル」をつくることを試みました。「芸術を世界に発信」から「芸術を地域の身近に」とお題を変更し、「自分たちが芸術を身近にできていないのはなぜだ」と問いを深めていったのです。このように成果可視先行型で評価軸を持つことは、文化行政のプログラム評価にプラスですが、もちろん現場側にもプログラムの改善や作品の深まりという点でメリットがあると考えています。

関係者会議の様子

評価への反発

—「芸術をもっと身近に」という YokohamArtLife の課題は受け入れられても、芸術・文化に関わる活動を「評価」することに反発はなかったのでしょうか？

「評価は事業改善と対話を促すための道具」「評価するのは作品ではなくマネジメント」「評価をするのは自分たちのため」というマインドセットを制度側と活動側の双方で確認しあうことが大事ですが、実際はとても苦労しました。各プロジェクトの評価手法や共通の指標を検討する関係者会議では初回から大論争になりました。

先に述べたように評価とは対話を促すためのツールなので、もちろん議論は起きます。現場からの要望で無難なアンケートを実施した 1 年目の終わりに、今度は審査員の中村美亜先生から「これだけ先進的なことをやっているのに、アンケート項目がよくある行政的な質問でもったいない」「個別の取り組みも芸術と他領域の融合の部分が評価できていない」と指摘がありました。これによって、2 年目は「芸術ならではの価値、芸術が他領域と連携する価値をどのように計るか」という視点が生まれました。これを解決するために今度は岡田猛先生にご協力いただこうと、自分たちのネットワークや知見が広げていったのです。

— 2 年目の反応はどうでしたか？

1 年目の経験が 2 年目に花開いてきた実感はあります。各団体の申請書や中間報告会を見ても、確実に文化的価値に加えて社会的価値も意識した話が伺えるようになっています。実は 2 年目に実施した岡田猛研究室作のアンケート設問は、1 年目には大論争を経て諦めたデリケートな質問もふくまれていたのですが、各団体にご協力いただけました。これは認知心理学の専門家であり、芸術にも精通する岡田猛先生から説明があったことも大きいと思います。

「芸術を身近に」ってどういうこと？

— 最後に YokohamArtLife の活動を振り返り、どのような成果を感じていますか？

YAL の採択活動からは、芸術活動において場や空間の設定を工夫することにより、芸術活動と地域社会の信頼関係を築く効果があるとわかりました。参加者は芸術活動と地域社会が協働する場で芸術に触れることで、文化的価値に加えて社会的価値も感じるようになっています。こうして地域に芸術が浸透していくと、芸術活動が地域社会の基盤となり得る未来が見えてきます。YAL を通じて、このように芸術の公共性を考えることができたのは意味がありました。

また、この取り組みは 2019 年にはじめたものですが、その後に期せずして新型コロナの時代が来ました。社会的にステイホームを促されるなか、芸術が不要不急のものか否かという議論が巻き起こりました。私は無論、必要不可欠と考えており、多くの仲間も同意見でしょう。そうであれば、それをどうしたら止めないでできるかを考えるのが私たちの仕事になります。今回、各地のプロジェクトを通じて住居の徒歩圏内に芸術を享受できる場があること、それが開かれていることの大切さをつくづく感じました。それを見せることができたのは、YokohamArtLife の大きな成果の一つです。集まりの多様性は、都市の多様性になります。そこから生まれるユニークな出会いをどのように増やしていくのか、というのが次の「問い」になるでしょう。

何のために芸術文化活動を評価するのか?

各団体の指標づくりの試みをサポートされてきた、審査員兼アドバイザーの中村美亜先生にお話を聞きました。

ー中村先生は YokohamArtLife（以下 YAL）にどのように関わられていたのですか？

今回のプロジェクト立ち上げの際に、YAL 事務局から相談を受けるところから始まりました。最初は、指標を事務局側が決めるというお話だったので、団体側に考えてもらう方がいいんじゃないか、とお伝えしました。審査会では、できるだけ皆さんの活動のよいところは何かというのを探すようにして、それを自分たちで自覚してもらう問いかけを心がけました。事業がうまくいっているかは肌感覚ではわかっても、言語化はしづらい。だから、教えるというよりは、引き出すような問いかけをしていきました。

ー当初は事務局も団体も「評価」をよく理解していなかったと？

評価というと、どうしても自分たちの活動と直接関係ない人が、上から下に向けて、本質的でない部分で評価をするという一般的イメージがありますよね。皆さんも、そうしたイメージの中で、“ 仕方なくするもの ” という感じがあったと思います。YAL の申請書で各個の指標を考えて書いてもらったんですが、最初は、「ああ、やっぱりこんな感じか」とちょっと残念な思いを持ったことを覚えています。

ー どのようなところに「残念な思い」を持たれたのでしょうか？

どの団体も評価指標を書いているんですけれども、活動の本質とはあまり関係のない部分を指標化して書いていらしたことですね。これは、ここだけで起きている問題ではなくて、全国至るところで起きている問題なんです。ですが、YAL ではだんだんと時間を重ねていくうちに、大きな変化がありました。特に、二年目の中間発表会の質疑応答が凄くよくて、驚きました。要するに、自分たちがやりたいことを社会に向けて説明する時に、どこが大事になるかということをおさえられていたんです。20 年度は特に、これまで芸術文化活動に関わっていなかった方々も入って来やすい場を作ることの工夫がきちんとされていた。そして、助成事業が終わって、自分たちで事業をやっていくために何をしていていくかも伝わってきたんです。やはり自分たちで自分たちの活動を見返しながら進んでいったというのは、非常に大きいものがあったんじゃないかと思います。

ー自分たちの活動を見返すために、評価がある。

そうです。評価って、それを目的にしているんじゃなくて、評価を通じて自分たちの良さを知るということだと思います。内輪での言葉ではなく、外の人と対話をするための言葉を見つけていく。それが見つかると、自分たちの良さも分かるし、説明もできるし、どういう風に改善して行ったらいいかも分かるんです。そのためには、外部と対話をつづけるしかないとも思います。アートの場合、ちょっと厄介なのは、プロジェクトの評価をすることと、そこで行われたアート活動の中身や、アートの質を評価することがごっちゃになることなんですよね。アートにはジャンルごとにそれぞれ厳格な内部的評価システムが既にあって、アートに関わる人たちは、それで評価されるのではないかという恐れもある。ですが、ここでしているのは、自分たちで指標を考えて評価をしていくということなので、非常にクリエイティブなものなんです。

ー今回の YAL の挑戦について、率直な感想を聞かせてください。

こういった試みはあまりないので、もっと増えていったらいいなと思います。事業の多くは、最初に採択で審査されるだけで、報告を出しても、それに対するコメントがあまりなくて、結局ジャッジされるだけになってしまう。でも、普段からの人間関係があって、「この人たちはちゃんと私たちの活動を支援してくれているんだ」と思えたら、もっと評価に前向きになれるはずなんです。私たちの研究チームの仲間が言ったことなんですけれども、評価っていうのは、測定ではないから、評価の “ 価 ” を “ 評 ” しなきゃいけない。ありがちなのは、測定するだけで評価を知ったつもりになることですが、測定をした後、それがどうかを見るのが評価なんです。考察しなくてはいけないし、数値に表れていない様々な状況から判断しなくていはいけないんです。そこの部分が一番大事なのに、欠落している。測ること自体が悪ではありませんが、測った数値が良い悪いで一喜一憂するのは、ちょっと違う気がしますね。数値をどう解釈するかが重要で、それを次にどう生かすかがもっとも問われるべき点です。

ー「評価」は目標達成をはかるためだけの、使い捨ての道具ではないんですね。

芸術文化系の活動は、ある一定の目的に向かいますが、それが最短で達成することが最善とは限りません。むしろ、想定していなかったステークホルダーが現れて、その人と連携したとか、計画を変更して違うことを行ったらいいことが起きたとか、予想外のことが起こった方がいい。ただ、それは闇雲にやっていれば起きるわけではなく、それが起こりやすいプロジェクトのデザインがあるはずです。そう考えると、表面的な評価軸を、団体の外側から設定するというのはあまりよくない。ですが、日本も含め、いろんな国の行政側が、文化に対してあまりよく分かっていない部分があると思います。効率のいいクリエーションやイノベーションの仕方があって、そこに向かっていけばいいという理解があるのかもしれないですね。自分が今まで知っていた範囲ではできないことがあるからこそ、クリエーションをする必要があるわけなので、予期しないことに触れたり、自分たちの考えもつかない人と一緒に何かをしない限り、イノベーションは生まれません。未知のものと出会い、かつ、いいものが見つかった時に、それを育む環境を作れるかどうかが一番大事なんですよね。それは、芸術文化活動でも、それ以外の活動でも同じです。それができる環境を作るためにこそ、評価をするのだと思います。

中村 美亜（なかむら・みあ）
九州大学大学院芸術工学院 准教授
アートと社会の関わりについての研究に従事。とくに多様な人たちが参加するアートの場の作り方、ファシリテーションの方法、芸術文化の価値と評価に関心がある。共編著に『“ 社会包摂×文化芸術 ” ハンドブック』シリーズ（九州大学ソーシャルアートラボ、2019, 2020, 2021）、『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』（東京文化会館、2020）、『ソーシャルアートラボ』（水曜社、2018）、単著に『音楽をひらく』（水声社、2013）など。

左近山団地でのアートフェスティバルの開催やコミュニティカフェの運営

左近山アートフェスティバル！の挑戦

個別指標：プロジェクトごとに定めた評価の視点

1 左近山の価値を高める・広める

この活動を知って住んでみたいと思う人を増やし、実際に左近山住民を増やしたい。

2 さまざまな住民の居場所となる / コミュニティ活動拠点になる

左近山アトリエが、住民にとって大切な場所になり、黒字経営ができる。

3 アートコミュニティ

多様な価値観を認め合うコミュニティを形成する。

アトリエスタッフが「見た」「聞いた」「話した」ことを日誌に記録。日誌からストーリーを抽出し、ゴールに対する効果を測定する。

指標の測り方

物語として聞く

左近山アートフェスティバル！ は左近山団地に様々な文化が育つ未来の場を作り出すためにアートイベントの開催とアート拠点「左近山アトリエ131110」（以下、アトリエ）の運営を行っています。アートが文化を生み出す可能性を信じるからこそ、アートイベントの開催を最終的な目的とするのではなく、アートを補助線として、住民の多様な価値観を引き出しながら、左近山らしい風景を生み出そうと模索しています。そこで今回は、アートが日常にある取り組みとして活動しているアトリエのスタッフが、来店者と話をする中で聞こえてきた声を、「物語」として記録することにしました。軸にしたのは左近山アートフェスティバル！の目指すゴールと対応するキーワード「左近山の価値を高める・広める」「さまざまな住民の居場所となる」「多様な価値観を認め合うコミュニティを形成するアートコミュニティ」です。スタッフは、この 3 つの軸でお客様との日常の会話を拾い集め、ノートに書き溜めていきました。集まった「物語」は 2021 年 2 月末までで 300 余り。この物語をたどることで、このプロジェクトの意義やこれからの方向性が見えてくるのではないかと思っています。

旭区 左近山散歩フェスティバル！ 2020年度 撮影：菅原康太

スタッフの日誌より

今日から火曜日水曜日の朝、8 時前後、横浜国立大学の学生がアトリエの前で「おはよう」活動開始。アトリエスタッフも、12 時半頃小学生下校にあわせ「おかえりー気をつけてねー」と声を掛けていく。子供笑顔で手を振る。（2020/6/16）

4 人家族（子 2 人）が来店。団地暮らしに興味があり左近山に住居を見学しに来たらしい。調べるとアートフェスティバルなどいろいろ盛んそうだったため、他団地と比べ左近山を選んだらしい。お母さんから団地暮らしはどうか？や学校のことなどを質問された。常連女性とも会話し、左近山をオススメする。（2020/7/11）

16時頃にBさん（70 代男性）からカボスを 1 個いただきました。炭酸やお酒に入れたら美味しいとのこと。15 キロ友人から送られてきて配っている途中でした。またカボスを持って来るかもしれないとのことでした。（2020/9/6）

ご高齢の女性が散歩の途中アトリエに立ち寄り、左近山マップに情報を追記してくださった。［タツナミソウの群生有り。］（2020/9/20）

昼過ぎに入り口の左近山の地図を見ながら話されるご高齢の男性。素晴らしい地図だと褒めてくださる。（2020/11/27）

小学生 C さんが店頭のイーゼルで絵を描いていると、高齢者がたくさん話しかけてくれる。また別の大人と伝言しながら絵を描いている。毎日楽しみに寄ってくれる方もいるし、画材をくださる方もいる。（2020/12/11）

個別指標の振り返り

1 20年度は新型コロナのため、アトリエとフェスの対象は団地住民に限定したが、ローカルメディアで多く取りあげられた。アトリエのアーティストやスタッフのファンなどが団地外から集まる場にも。SNS でも「mikke! 左近山（散歩部）」が活動を開始し、団地の魅力をアピールし続けている。

2 子どもたちの居場所となり、テラスではカードゲームを楽しむ姿も。7-80 代の一人住まいであったり問題を抱えていたりする高齢者たちにとっては喋り場に。また、商店街イベント企画運営スタッフや横浜国立大学の学生のコミュニティ活動「サコラボ」のメンバーが相談しにきたり、活動の場としたりしている。横浜国立大学の学生が朝の店頭で「挨拶活動」をはじめたり、アトリエ店内で遊んだり宿題する子どもたちがいたり、子どもたちが多世代（大学生、高齢者、子育て世代）とつながる場になっている。ただ、黒字経営はコロナ収束以降の課題となった。

3 ワークショップや、個人の自由な制作活動などアートを軸として、多様な人達の交わる場となっている。

横浜市各地での移動型暗室による写真体験の提供

PHOTO CABINの挑戦

個別指標：プロジェクトごとに定めた評価の視点

1 Experience

五感を刺激する写真体験をデリバリーし、想像力を豊かにしていく

2 Community

写真を通して人や地域との接点が増えていく

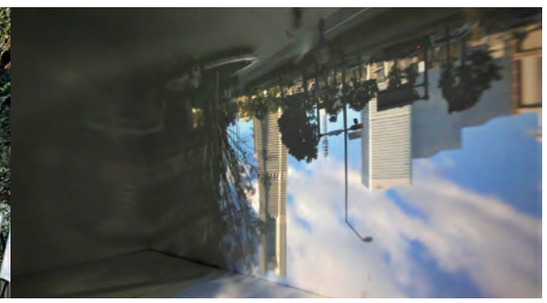
3 Potentiality

写真の可能性を１人１人が感じ、日常の中に取り入れる人が増えていく

指標の測り方

文化の根付きを追う

移動型暗室 PHOTO CABIN の活動で、これまで写真に触れる機会のなかった人々が、写真に触れたことで新しいものの見方や気づきが得られたか、また、写真体験を通して仲間づくりができたか、そして、その先の写真文化につながるような関心が持ってもらえたかが知りたいと思いました。そこで、カメラの原理の体験や、プロのカメラマンやプロの機材で撮ったり撮られたりなどの写真体験ワークショップの後に、参加者にアンケートを実施して変化を捉えようとしました。20年度はそれに加えて、その場の体験で終わらないよう、SNS をプラットフォームとして活用することにしました。そこでは、いつでも写真を投稿したり、写真にコメントしたりすることができ、写真を介した多様なコミュニケーションが行えます。アンケートと SNS を通して、写真文化が根づいたかどうか、変化を追っていこうと思っています。



（左）金沢区 PHOTO CABIN 2020年度　（右）中区 PHOTO CABIN 2020年度
撮影：NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル

参加者・会場からの声

具体的に何かしたくなったことがあれば教えてください

カメラの原理を少し教えてもらったことで写真を撮ってみたくなった（50 代女性@北仲フェス）

（カメラオブスクラ制作）キットで身の回りの色んなものを子供に見させてあげたい（30 代女性@金沢動物園）

ワークショップの中で「何かしてみたくなった」きっかけとなる出来事があれば教えてください

カメラの中に入り、モノが逆さにうつることを体験できたこと。子供も学校の授業とは違う形で学ぶことが出来たと思うので、その想いを大切にしたい。（40 代男性@玄海田公園）

遠く出かけなくても近くで体験できたので何かしてみたくなった。（70 代男性@玄海田公園）

今回のワークショップについて、気づいたことや感じたことがあれば自由に記述してください

話をされていた通り、クリエイティブな仕事をしている人または子供達は人生に一度は体験した方が感性が変わると思いました。（20 代女性@三井アウトレットパーク横浜ベイサイド）

他のイベントと共に気軽に芸術について体験できるのは非常に良い機会だと感じた。（30 代男性@北仲フェス）

普段の景色が違って見えた・モノを見るとき新しい視点をもてたと感じる理由を簡単にお聞かせください

簡単な仕組みで大きくきれいな画像を見てびっくりしました。ゲルマニウムラジオをはじめて聴いた時のことを思い出しました。（60 代男性@北仲フェス）

暗くて何かが制限されたほうが感性は研ぎ澄まされるのかもしれない。（60 代男性@北仲フェス）

個別指標の振り返り

1 参加者・会場のから声にもありますが、20 年度は、各会場に多くの方が来場され、想像力や創造力を刺激された、モノの見方が変わったという、声を多くいただきました。

2 この取り組みの特徴として、住民の身近な場所に写真体験を届けることがあります。20 年度のたまたま来た、通りすがったから参加した、という方が多く、開催地域の方に多くご参加いただけたと実感しています。アンケートからは、地域に興味がわいたり、愛着やつながりを感じたという結果も出ており、参加者とその地域の接点をつくれたと思っています。

3 参加者の声や、アンケート結果から、今後も写真と関わっていきたい、また、写真を身近な人と共有したい、と思っている方が多いことが分かりました。

以上の事から、今回個別指標で変化を追った、新しいものの見方や気づき、仲間づくり、写真体験のその先の写真文化へのつながりといった点について、変化が出てきたと思っています。また、個別指標の取り組みで、これから、この活動を継続するにあたってのヒントなどを得られたと感じています。

金沢シーサイドタウンでのアート作品展示

YOKOHAMA AIR ACTの挑戦

個別指標：プロジェクトごとに定めた評価の視点

1 アートへの関心度･注目度（内部･外部）

調査方法：アンケート（紙面・web フォームで調査）

2 アートの話題性

調査方法：ハッシュタグ調査・画像分析など、アンケートなど

3 団体との連携度

調査方法：ヒアリング、意見交換

指標の測り方

アートと地域とのつながりを考える

「アートを媒介に参加者（住民・来街者）が交流する機会が増え、並木というまちが内外に開かれる」姿を目指し、今年度の事業においては「①アートへの興味関心・注目度が高まる」、「②アートがまちの共通の話題となり、SNS 等で発信される」「③組織･個人との協力関係が構築される」といった状況をアウトプットに位置付け、各指標を作成しました。

「アートの話題性」において調査方法と位置付けたハッシュタグ分析は母数としては少数となったため、「アートへの関心度・注目度」と同様に、アンケートにより内容を補完しました。また、アンケートだけでは見えてこない、地域の方や地域団体の声も聞きたいと思い、2021 年 3 月上旬にヒアリングを開催しました。

それぞれの調査の結果からこの活動の意味を見つめ、今後もアーティストが継続的に活動し、それを通して並木の新しい魅力を感じてもらえるよう活動を続けていきたいと考えています。

金沢区 YOKOHAMA AIR ACT ナミキアートプラス キム・ガウン《君に会う》
富岡並木ふなだまり公園 2020 年度 撮影：笠木靖之

参加者のインタビューより

研究者から見たまちづくりにおけるアートの効果とはどのようなものがありますか？

まちづくり活動を展開してきた立場からの回答ですが、アートには間違いなく「訴求力」があり、これは常に展開が難しいまちづくり活動にとって重要な要素です。特に今回、計画的な住宅団地（≒目に見えるわかりやすい問題がない住宅地）だったことで、その訴求力が明確に見えました。良い反応だけでなく、負の反応や軋轢もその顕れと言えるでしょう。硬直化した地域社会を揺らす「撹拌力」とも言えます。ただし、その注目を今後のまちづくり活動に引き込むには、工夫と継続性が必要です。「訴求力」を「巻き込む力」に発展させるには、個別の工夫や精力的な取組が常に課題なのだと思います。

中西正彦
横浜市立大学大学院都市社会文化研究科教授 /
共催「あしたタウンプロジェクト」運営メンバー

地元から見たまちに対するアートの効果とはどのようなものでしょうか？

少子高齢化で活気を失いつつあるこの町に新しいことがやって来るのは嬉しいことです。ただ、ここは横浜市六大事業で産業団地を造成した際、その居住地区として造られた町であり、アートをはじめとする文化に関する施設や土壌があまりありません。ピンクの猫は衝撃的でした。抵抗感の先に「面白かったね」という声が聞こえてきました。今回の作品は語りかける様な絵が楽しいです。語りかけるストーリーがもう少し分かりやすいと良かったですね。 私個人としては動的なアートイベントを希望します。
ダンス、音楽、光など、さらに住民を巻き込むモノを企画してもらえれば嬉しいです。この町にどんどん新しい風を吹き込んで下さい。

髙島哲
富岡並木ふなだまり gionbune 公園愛護会会長

個別指標の振り返り

個別指標「①アートへの興味関心・注目度が高まる」は、主にアンケート調査から成果を測定することができました。そこでは、点在する作品を日常的にみて回る地域の方の姿が浮かび上がってきました。そして、アートへの関心が高まるきっかけとして当プロジェクトが作用している様子もみてとれました。一方で、これが一過性のイベントで終わることがないよう、継続することの重要性が指摘されています。これに関しては「個別指標③組織・個人との協力関係が構築される」と関係します。今回は「あしたタウンプロジェクト」との共催という形が実現し、今後、連携・協働していくための基礎がつくられたといえ、地域の新たなコンテンツとしての「アート」のあり方を模索していく入口が築かれました。このように、個別指標の設定が相互を補完している結果となりました。しかし、個別指標「②アートがまちの共通の話題となり、SNS 等で発信される」に関しては、詳細な把握ができておらず、課題が残されました。調査からは、地域内外で「話題」となったことや、自主的に情報発信をしてくださった様子を知ることができましたが、改善の余地を残しているといえます。
このように、指標を設定することで、プロジェクトの進度・深度をはかることができました。そして、並木におけるアートプロジェクトの現在地を知ることができたことが大きな成果といえます。

上野正也 / 神奈川大学工学部建築学科特別助教

生きづらさを抱えた子ども・若者とつくるミュージカルプロジェクト

M6 Musical ACTの挑戦

個別指標：プロジェクトごとに定めた評価の視点

1 参加者の変化
- 身体的変化
- 精神的変化
- 社会性 / 他者との関係性の変化
- 具体的な行動や意欲の変化

調査方法：参加前後のアンケート、ヒアリング、レッスン時のアンケート

2 アーティストの変化

調査方法：ヒアリング

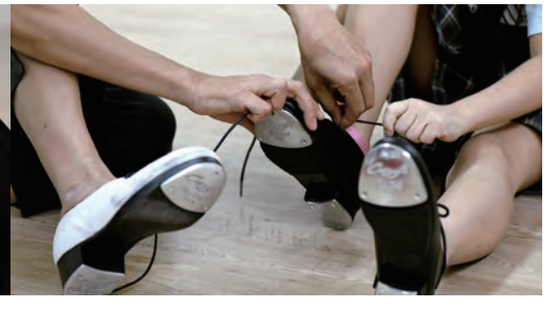
3 地域の変化

調査方法：発表時のアンケート、ヒアリング

指標の測り方

日々の小さな変化を聞き取る

生きづらさを抱える子ども・若者たちがミュージカルを共に作り上げることで、どんな変化が起こるのか。また、福祉と芸術が協働することで得られる価値はどんなものなのかを探りたいと思いました。
普段、若者たちと接している中で、ミュージカル発表という一つのプロジェクトに関わって変化したことを聞くことはあっても、それを数字で拾うということはなかったので、この取組では、数字で客観的に見てみようと試みました。やはりそれだけでは個別の変化を追う事は難しいので、継続的にレッスンに参加している若者を対象に発表会前後でインタビューを実施しました。また、発表会当日の観覧者にもアンケートを実施し、地域の反応を見ることにも挑戦しました。



磯子区 M6 Musical ACT 練習風景 2020年度

プログラム参加者の声

1 年間（もしくは 2 年間）の活動を通して、自分の中にどのような変化が生まれたと思いますか？ポジティブなものでも、ネガティブなものでも、ささいなことでも構いません。心情や自分の行動、考え方などの変化について、ぜひ教えてください。

前までは自分のことで精一杯でしたが、ミュージカルの仲間と接するうちに、意外な一面がわかるようになり、他人に興味をもつことが多少できるようになってきました。…考え方については、少し他人に寛容的になったと思います。あと、自分の体力や精神面のことについても前向きになれたと思いました。とても変化があった 2 年間でした。

人を喜ばせることができたとも思っていて、人間として、達成感に満ちたものに、近づけたと思います。練習はくじけそうになったこともあります。自分なんて、と思ったりもしました。でも、最後までやり遂げて正解だったと思います。

まともに歌ったり踊ったり、演技した経験が無くコミュニケーションも満足に取れていない状況で、不安な気持ちを抱えるが、逆に考えてみるとチャンスでもあり、こんな機会はまず無いだろうと思い期待と不安を最初の頃抱いていた。…ダンスやタップの練習を行い始めてしばらくすると、その日の練習が終わった時大分調子が良くなっている感覚が出てきて、夕食を食べて寮に帰る時走りたくなったりする。

私は、自分に自信はないし、歌もダンスも演技も下手です。だけど、歌もダンスも演じることも人に負けないくらいに大好きで、またやりたいなと思います。

「難しくなんかない…こんなにも面白い事なんだ」と思えるようになった。ちなみに私は「自分で考えたストーリーで演劇をやってみたい」と思っています。テーマは「社会の中で生きづらさを感じ、抱える若者達」です。

個別指標の振り返り

- 去年と違い、余裕を持ったスケジューリングで、ターゲット層を集めやすかった。
- 活動開始初期は zoom でのレッスンから開始したため、遠方からの参加希望者の見学などがしやすく、新規参加者の確保につながった。
- 2 年目の継続参加者と新規参加者のバランスが良く、場がまとまった。
- コロナ禍であったが、ステージトラックでの野外公演という「発表の場」が確保できた。
- 「映像制作ワークショップ」の実施で、出演者ではない参加者も目標と達成感をもって巻き込むことができた。
- 個人差はあるが、参加者全体を通して初期アウトカムのうち、特に「身体的・精神的変化」の達成（ポジティブな変化）が見られた。

横浜市各地の図書館での音楽劇の開催

テアトル図書館へようこそ！の挑戦

個別指標：プロジェクトごとに定めた評価の視点

1 参加者の変化

アートに触れたことによる参加者の変化

2 図書館との関係性

図書館と区民文化センターとの新たな関係性

・アンケート用紙（選択式 / 自由記述あり）を参加者に配布し、集計を行う。
・図書館との事前打合せ、事後ミーティング

指標の測り方

参加者個別の変化を大切に

同じような取り組みに以前も挑戦してみましたが、難しかった印象でしたので、指標づくりは大変でした。それでも、地域の人にとって、アートが日常となり生きがいとなっている姿を理想として、そのために参加者個人の変化、図書館など公共空間とアートとの新たなつながりを追ってみることにしました。工夫したのは、ワークショップと上演の前と後で何か変化があったのかを追うために、前後に分けてアンケートを記入してもらうことです。また、参加者には、未就学の子どもたちもいましたので、そういった子どもたちには、スタッフが、1人1人コミュニケーションをとりながら聞き取りをしました。そうすることで、回ごとのフィードバックが得られ、次回の工夫につなげられました。また、図書館側との連携をスムーズにするために実施前の打合せ、実施後の振り返りミーティングを行い、図書館との関係を大切にしました。

鶴見区 テアトル図書館へようこそ！（鶴見図書館）2020年度 撮影：おおたこうじ

参加者・会場からの声

子どもの声

- たのしかったからまた見たいです。
- 次にやった時はもうちょっと長くしたいです。
- 俳優さんの声に特徴があって面白かった。

大人の声

- 身近な図書館でこんなすごい芸術を見ることが出来て感動しました。
- 「あらしのよるに」シリーズは、実を言うと、そんなに好きな本ではないのですが、構成、演技、音楽の良さと、自分の参加もあって、とても楽しく感じました。
- とても楽しかったです。初めてのお芝居でした。
- 地域の小さな子どもと同じイベントに参加できてよかった。自分に子どもがいないとこういう機会がないため。
- シンプルな編成なのにとても豊かな表現だなと思った。子供たちが豊かな感情を得られるように、芸術に触れる機会を増やそうと思いました。
- 昔、趣味でバイオリンをやっていました。すっかりひかなくなってしまいましたが今日ヴィブラフォンの演奏を聴いてまたやってみようかなと思いました。
- 子連れではとあきらめていた中で、可能な部分もあるのだと分かりました。又、子どもにもっと「ホンモノ」に触れさせてあげたいと思いました。今日のことで「ホンモノ」が一番と確信しました。
- さすがプロの役者さん！話も面白かった。司書による図書館の紹介もとても素敵でした。
- 狭い限られた場所で、演者も二人なのに楽しい空間でした。

個別指標の振り返り

1 参加者の変化

音楽を身体や身近にあるものでつくりたい。 / 違うお話でお芝居して見たい。 / 表現してみたい！劇場以外で初めてお芝居を見ましたが、図書館とのつながりなど面白いと思いました。もっと見たくなりました。 / 表現する楽しさを味わいたい。 / 子どもに芝居を見せたい。 / 表現することができそうな気がした。

2 図書館との関係

図書館単独では企画できない本と演劇が連携したプログラムを開催できて嬉しい。 / 普段、図書館で実施するお話し会にはお母さんと子どもの組み合わせが多いのに、テアトル図書館には家族全員で来場していたのが嬉しい。 / 普段、図書館に来ていない層が来ている。

といった声をいただいています。また、21 年度のテアトル図書館の募集も致しましたが、20 年度より多くの図書館にお申し込みをいただいており、図書館とアート、区民文化センターの新たなつながりができたと、実感しています。

参加団体座談会インタビュー

わたしたちにとって評価とは何だったのか？

YokohamArtLife（以下 YAL）では、アートプロジェクトを開催するだけではなく、そのプロジェクトの評価を通じて、プロジェクトの意義を広く社会と共有することを目指しています。今回は 2021年 1 月に YAL 参加団体と同事務局、そして評価作成にご協力頂いた東京大学大学院岡田猛研究室の方をお呼びして、評価とどう付き合ってきたのか、どんな課題や可能性があったのかをみなさんと考えました。

左近山：STGK Inc.（ 左近山アートフェスティバル！）
PHOTO：ザ・ダークルーム・インターナショナル（PHOTO CABIN）
AIRACT：YOKOHAMA AIR ACT（YOKOHAMA AIR ACT）
M 6 ：ヒューマンフェローシップ（生きづらさを抱える子ども・若者とつくるミュージカルプロジェクト M6 Musical ACT）
テアトル：横浜メディアアド（テアトル図書館へようこそ！みんなのまちの図書館が劇場に変身する！）
岡田猛研究室：東京大学大学院教育学研究科岡田猛研究室
事務局：横浜市芸術文化振興財団

西区 テアトル図書館へようこそ！（中央図書館）2020年度 撮影：おおたこうじ

— 今日の座談会は「参加団体の方々にとって評価とは何だったのか」について、みなさんご自身の活動の中で感じられたこと、考えられたことを掘り下げていくような会にできればと思います。

評価は面白くない？

杉崎（事務局）まず、率直にお聞きします。参加団体のみなさんにとって、評価を行うことに、面白さや意義は感じられましたか？

齊藤（テアトル）ためにはなります。でも向き合い方は難しいですね。「評価」を考えると、行為を振り返って地ならしをしていくことになる。そうやって、石橋を叩くように進んでいく自分も悪くないのですが、勢いは失われているので、その点では面白く感じられないですね。

北野（AIRACT）個人的に、アンケートという形だと、テストしている感じがして、あまり好きではなかったです。

杉崎（事務局）なるほど。例えばテスト作りとは、仮説を立てて「どういう風に答えてくれるかな」といった想像をして、問いを作ることだと思います。アンケートには、そうした仮説の検証の面白さがあるんじゃないかと思っているんです。みなさま、この点についてはいかがでしょうか？

北野　その意味での面白さはあると思います。ただ、直接話す声と、かしこまって形として出てくるものや数字として出てくるものって、印象が違ってきますよね。イベントにいらっしゃった人と話していて、「あれよかったね」と言ってもらう柔らかさに対して、アンケート調査になると、五段階評価の「よかった」「よくなかった」という数値に落ちていってしまう。そこを楽しめる余裕が自分にはあまりなかったですね。

杉崎（事務局）現場でやりながらだとそうなりますよね。それは理解できます。

近藤（PHOTO）指標についても、疑問がありました。今回、アンケートの共通指標は、全団体が同じ指標・質問項目を立てていますよね？そうした共通指標に基づいてアンケートを行う中で、参加した人の反応が気になったんです。例えば、「新しいアイデアが湧いた」といった質問に対しては、参加者の方はとても肯定的に理解して下さったのですが、「自分がすごく認められていると思った」といった質問には、「？」マークになっている方が多く見受けられました。「これ、今回のワークショップやイベントと関係ある質問なんですかね？」と。

これは聞き方の問題なんだと思いました。私どものワークショップでは、「写真のワークショップでやったことと同じことをしている、ご家庭内の風景を映像で撮らせてください」というお願いをしていて、私自身、家族と実際に行ってみたんです。すると、子どもたちのいろんな心の機微が見えてきたんです。だから、あえてアンケートの記述式の設問で問いかけなくても、映像の収集などから、自分たちで評価を拾い上げていくことはできるのかなと思いました。やり方次第なのかもしれないですね。

森（左近山）今のお話を聞いていて思い出したことがあります。昨年度、YAL の方から提案頂いた共通指標のアンケート項目の中に、「今回のアートに参加して生活が変わりましたか」とか、「日々の生き甲斐がありますか」とか、「友達がいますか」とか、そのまま用いると難しい項目が色々あったんですよ。左近山団地には、七十代、八十代のお年寄りの方も多く住まれて

います。そうした方々の生活を根掘り葉掘り聞く形になってしまわないよう、配慮を求めました。

— 参加者の方への配慮も重要になってきますよね。「生きがい」だったり、その方の生活に踏み入ってしまうものは問題がある。

杉崎（事務局）そこに関連して、2 年間参加された団体の方にお伺いします。共通指標で参加者のプライバシーに関わる質問をすることについて、1 年目ではみなさんから反対意見を頂き、中止しました。対して、今年のアンケートの内容も、個人の生活や個々の心理的な変化について聞いています。事務局としては、前年の設問と似てるのではないか、という印象を持っているんですね。これについて、みなさんはどうお考えでしょうか。

森 前年のものは、お年寄りの方に対して「生きがいがありますか」とか、失礼に感じられるかもしれない設問があったので、私は反論しました。でも、今年はそこまでじゃない、プレーンな感じで受け取れる質問だと思いました。

杉崎（事務局）なるほど、マインドセットの違いでしょうか。最初から、「孤立しているお年寄りの方がいる」といった仮説を立てて、その

旭区 左近山散歩フェスティバル！ 2020 年度 撮影：菅原康太

方たちに聞こうとする偏った態度でアンケートを作ってしまうのか、それとも、今、森さんがおっしゃったように、プレーンな状態で、個々人における変化を聞くのかは、確かに全く違いますね。1 年目、「孤立したお年寄りの方々を助けよう」というような、上から目線でアンケート取るように思われたのだとしたら、そんなのに加担出来ないとなるでしょう。そういう理由で、みなさん一斉に、「おかしい」とご指摘されたのでしょうか。

森 そんな気がします。

— アンケートで直接参加者の方の生活に踏み入る形になってしまうのを避けて、適切な距離を取りながら評価を行うための別の方法もあるのかもしれません。ヒューマンフェローシップの岩本さんは、評価に関してどんなことを感じられたでしょうか？

岩本（M6）質問内容が誘導的になってしまう点に難しさを感じていました。これは私たちの個別指標での話なんですが、わたしたちのプロジェクトに参加している若者に、変化や良かった点を聞くと、こちらの期待に過剰に応えようとする人と、反発してわざとマイナスのことを言う人がいて、そこの読み取りが難しかったです。そこに、自分の見方も加わってしまう。

— 質問する行為それ自体が、質問する人に影響を与えてしまうわけですね。それは、森さんの場合とも深く通じる課題かもしれません。

杉崎（事務局）いまみなさんにお話頂いたのは、共通指標を用いたアンケート用紙以外の評価の手法をいくつか知っていたら、指標の立て方も違ったのではないか、というお話だと理解しました。その意味で、現在の YAL の評価の課題は、次の段階に行っていると感じます。評価をどうやるのかというレベルで、もっといろんなやり方を探ってみたい、という話をみなさんがされています。

共通指標の意義とは

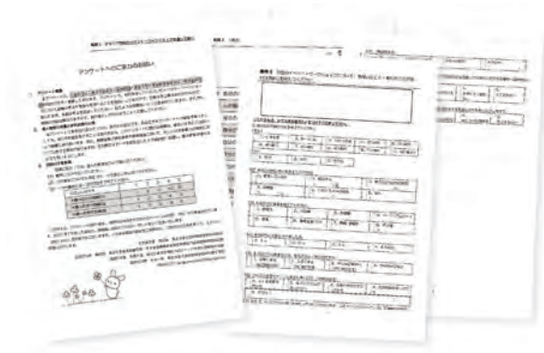
— 共通指標について、いま様々なやり方の課題が話されていたと思うのですが、共通指標の作成に携わられた松本さんからはいかがでしょうか。

松本（岡田猛研究室）みなさまが今までお話されてきたように、紙のアンケートに、同じ項目セットを用意して、同じように答えてもらう形式には確かに限界があります。映像や、その場のスタッフの方々が見たものを臨機応変に取り出していくものの方がいいんじゃないか、というご指摘は、とても的を射ているように感じます。他方で、質問項目を減らしてしまうと、他の研究や他の調査と整合的に比較できなくなってしまうんですね。なので、なるべく項目数を減らさないまま、いくつかの側面を押さえるようにした結果、現在の指標のセットになりました。

ここで比較というのは、次のようなことを考えています。例えば来年度、そしてその先も、新しい事業を行う際にも同じ質問紙を使うとします。評価する人は、一年経てば見る目もどんどん変わっていきます。しかし、指標の項目が一緒であれば、年ごとに事業全体でどんな違いがあったかを比較検討していくこともできますし、同じプロジェクトについて年ごとに違う修正をした時に、その修正がどのように参加者の体験に影響したのかを、主観を排して比較することができるわけですね。

一方で、どちらにもメリット・デメリットというのがあります。先程言ったように、アンケートの質問紙で項目セットを決めて、決まった形で質問する形式を取ることで、スタッフや調査する側の主観的な評価を排除できます。ただし、無機質で紋切り型になってしまうこともあります。反対に、アンケートではない形で、実際の現場の空気を捉えようとすると、柔軟にその場で色々な発見をすることもできますよね。しかし、その人の色眼鏡によって、いいところばかり見えたりだとか、主観的な部分が入ってきてしまう可能性もあります。ですから、評価において主観をどれほど取り入れていくかを考える上では、実際の皆さんの労力とコストを考慮し、ちょうどいい地点を探っていくことが、今後は必要になってくると思います。

全団体共通でとったアンケート



道しるべとしての指標

— ここまでみなさんが発見された課題をお聞きしてきました。共通指標についての話が多くなりましたが、自分たちのための指標をつくり、運用していった個別指標の中で得られたものをお聞きしていきたいと思います。

齊藤　指標づくりについて、我々も過去に勉強したんですけど、「これで一体何がわかるんだろう」と、最初は挫折してたんですね。ただ、今回指標を使ってみて驚くことがありました。頂いた参加者の方の言葉が指標に基づいてな

かったりすると、私たちも「ワークショップ、こうやってみようよ」とか、どんどん組み立てを変えていくことにしたんですね。すると、実際に次回の参加者の方から出てくる言葉が変わってくるんですよ。

— 指標を手掛かりに、ワークショップの構成を変化させていったわけですね。

齊藤　そうです。指標って、「“結果”じゃないんだな」と思って。指標を見ながらプロジェクトを行う経過の中で、我々の取り組みが大きく変化していく、ということが実感できました。だから、「個別指標ってすごいな！」と思っていますね。

— いまおっしゃった、結果じゃなくてその経過なんじゃないか、という言葉が、指標の役割を考えていく上で、他のプロジェクトを運営されている方々にとってもキーワードになりそうです。

北野　わたしたちのプロジェクトでは、2組のパブリックアートのアーティストと、1組のまちあるきプログラムのアーティストと活動していました。指標づくりの段階で、それぞれのアーティストの目指している方向や、プロジェクト全体の目標を話し合ったことで、それぞれのアーティストが担っていくプロジェクトの中での役割を明確にして活動に移ることができました。これは、すごく大事な時間だったと今は思っています。また、評価の話とはずれるかもしれませんが、関係団体とは互いに「今後はこういう活動ができるかもね」とコミュニケーションを取っています。アンケートではない、そうした直接のコミュニケーションによる、今後の取り組みに向けたプロセスに関しては面白いなと思っています。

近藤　ダークルームはこれまで20年、その時々で行政の方々だったり、企業さんと一緒に活動する中で、指標づくりやアンケート評価をしてきたんですね。けれども、活動を応援してもらうための成績表を自分たちで出しているような感覚で、「そのために指標を考えなきゃ」と思ってもいました。今回、専門家の方にも入って頂いてこの二年間やってきた中で思ったことは、指標は成績表じゃなくて、自分たちが今後どの方向に進んだらいいのか、それを判断するための道しるべになってくるんじゃないかな、ということでしたね。

— 指標が、プロジェクトのゴールをアーティストの方と共有するための地図になったり、進むべき道を決めるための道しるべになるわけですね。左近山アートフェスティバル！の森さんは、指標をどのように捉えられて活用されたのでしょうか？

森　プロジェクトでは、カフェ営業も行っていて、そこでは、アトリエのスタッフがお店での出来事を記録するアトリエ日誌を毎日つけていたんです。例えば、アトリエの前にキャンバスとか置いてあるんですけども、そこに「学校帰りの子供が絵を描いて喜んでいて、それをお年寄りが見守っていた」とか、そういうストーリーが日々生まれているわけなんですね。日誌に記録して、ストーリーを抽出して、その中から我々が立てている目標に合致するものを見ていく、そういう形で個別指標を取る試みを始めています。ただ、毎日のストーリーのどれを拾うかはこちらの視点になってしまいますし、効果測定はどういう感じでできるのか、と手探りの状態で進めている状態ですね。

佐藤（M6）わたしたちは、「自分たちのための評価になった」という実感を持っていました。というのも、指標によって「この子ってこういう風に感じてたんだ」といった個人の変化がまず見えて、さらに、対外的にプログラムの評価として使える統計的な部分の両方が見えてきたんですね。同時に、気づきにつながるような、役立つ答えを導き出すための質問作りがとても難しかったですね。自分だけでやっていると見えない部分だと思うので、そういう部分で第三者の方に関わって頂きながら作るしかないものに感じます。

— みなさん、指標を作る難しさと同時に、それを役立てる試みをそれぞれのやり方で深められておられて、特に、指標をどう役立てるかを模索されておられるんですね。みなさん、それぞれの活動から指標についての理解や課題を共有頂き、ありがとうございます。最後に、杉崎さんに今日の座談会で直接参加者の方のお話をお聞きになってのご感想はいかがですか。

杉崎（事務局）自分たちが価値を見出していることを、他の人に言葉で伝えることができるだろうか？ と考えること、YALではそれを「評価」や「自己評価」と呼んできました。こうした営みの賛同者が増えていけば、芸術の取り組みの第三者的な評価であったり、事業の客観的な評価につながっていく。それにより、芸術の場や制度が一部の人のためではなく、多くの人のためのものになっていくでしょう。その第一歩が、YALの試みだと思います。今日、この試みについて皆さんが言葉にされたことを伺い、「あぁ、やってきてよかった」と思いました。

鶴見区 テアトル図書館へようこそ！（鶴見図書館）2020年度 撮影：おおたこうじ

創造性をどのように可視化するのか

アートが人に与える価値を指標化するという試みについて、心理学的アプローチの見地から、専門家の岡田先生に寄稿していただきました。

アートに関わる活動やプログラムを「評価する」というと、怪訝な顔をされたり、抵抗感を示されたりすることがしばしばあります。またその際によく耳にする反論として、「アートの効果は簡単に数値化できるものではない」「アートの受け取り方は、人によって多様だ」といったものが挙げられます。

これらはいずれも「評価」を誤解しているか、狭く捉えすぎていると言えます。詳しくは後から説明しますが、評価とは数値化することではありませんし、作品からの受け取り方の多様性を否定するものでもありません。本稿では、評価がなぜ大事であるのかを述べた上で、アートに関わる実践を心理学的なアプローチから評価する方法について、簡単に紹介します。

「評価」という言葉は、一般的には、「価値を定める」「採点する」といったニュアンスで用いられることが多いかもしれません。特に税金が投入されていたり、地域コミュニティを巻き込んで展開したりするものであれば、その成果を可視化し、説明責任を果たすことも重要です。しかし、評価の役割はそれだけではありません。

評価の大きな意味として、当該の活動やプログラムをより良いものへと改善していくための示唆を得るということがあります。学習科学の領域で、「design-based research：DBR」という手法が提案されています（Barab、2014 [*1]）。この手法では、まずこれまでの実践の経験や何らかの理論的な知見に基づいて教育実践をデザインします。そして、実践を展開していくことと並行して、実践のプロセスや成果を評価し、実践の中での学習者の学びの内容や、実践がうまく機能していない部分などを同定します。その評価に基づいて、実践の内容や方法を修正し、実践のデザインの仕方についても省察します。その後も実践を企画・実施して評価するというサイクルを何度も繰り返し、実践をデザインするための指針や原則などを構築し、実践内容とその理論的フレームワークの両方の精度を高めていくのです。

この時、評価はそれ自体が目的ではなく、あくまで実践をより良いものにしていくための「手段」となります。したがって、ただテストを実施して「得点化」「数値化」すればよいわけではなく、プログラム改善のための示唆が得られやすいような方法で検証を行うことが重要になります。アートの活動にも、この DBR の考え方は有益だと考えられます。すなわち、ワークショップやプロジェクトを展開していく過程で、適宜評価の楔を打ち込むことで、活動そのものを修正でき、また以後の活動をデザインする上での指針となるフレームワークをより強固なものにすることができます。

それでは、そのようなアートに関わる実践の評価は、どのように行ったらよいでしょうか？どのように評価のための指標を設けたらよいでしょうか？評価のあり方をデザインする第一歩は、実践の目的、すなわち、参加者・鑑賞者に何を体験させたいのか、何を持ち帰って欲しいのかということを明確化することです。まずはその軸から、実践のプロセスや効果を捉える指標について検討することになります。

ところが、この最初の部分が、アートの活動における評価を難しくする大きな要因になりえます。例えばアートのワークショップでは、他の多くの教育実践や学習支援の活動とは異なり、何か特定の理解させたいこと、身につけさせたいことが明確に存在しているわけではありません。むしろ、アーティストやファシリテーターによる「提案」に対して、参加者はそれぞれ異なるかたちで「触発」され、多様な方向に考えを巡らせたり、刺激を受けたりということが頻繁に起こり、それが歓迎されます（岡田、2016 [*2]）。したがって、アートにおいては、目標を一つに定められず、それゆえ「目標への到達度」という枠組みの評価は馴染まないということが起こるのです。

しかしながら、「受け手の多様性」を尊重した形で評価を行うことも可能です。例えば、活動後のアンケートやインタビューにおいて、ワークショップの体験を通して何を考えたか、どのような刺激を受けたかを尋ね、参加者たちの中に生起した触発のバリエーションを取り出すことはできます。あるいは、参加者の振る舞いの変化や、実践中に生成された会話に着目することで、参加者の体験のプロセスやパターンを追跡することもできます。そこから、ワークショップの中で参加者に体験させたいことをデザインしたものの、その内容が不十分だったり、参加者にうまく伝わっていなかったりする部分を特定したり、逆に意図していなかった面白い反応を拾い上げることができるかもしれません。もちろん、評価を行うに際しては、実践を展開させていくこととは別のコストも要しますが、実践者自身が省察をするだけでは気づきえなかった、広がりのあるフィードバックを得ることができます。

最後に、評価を行うことの別の重要性を一つ指摘して本稿を閉じたいと思います。残念ながら我が国では、芸術文化の意義が十分に認められていない現状があります。文化芸術に費やされる予算の割合は先進国の中でも最低レベルで、学校の芸術系科目の時間数もますます削減されています。それゆえ、芸術文化の意義を広く知ってもらうために、アートに関わっている人がアートの重要性を実感し、アートの実践の多様な効果のエビデンスを示しながら発信する努力を重ねていくことが、まさに今求められていると言えます。今回の YokohamArtLife の取り組みも、そこにつながる取り組みになればと思います。

[*1] Barab, S. *Design-based research: A methodological toolkit for engineering change*. Handbook of the learning sciences, 2, 2014, pp. 233-270.

[*2] 岡田猛『触発するコミュニケーションとミュージアム』中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛（編）、「触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて」、あいり出版、2016 年、2-10 ページ。

岡田 猛（おかだ・たけし）
東京大学大学院 教育学研究科・情報学環 教授
1994年：カーネギーメロン大学大学院博士課程修了（Ph.D. in Psychology），
名古屋大学教育発達科学研究科 助教授、教授を経て、2005年より東京大学
大学院教育学研究科 准教授、2008年より現職。

岡田猛研究室による心理指標を用いた分析結果報告

近年、芸術文化に関わる教育実践は様々な地域、コミュニティで行われ、その意義が注目されつつある。YokohamArtLife では横浜市の住民を対象に、様々な団体が芸術文化実践を行ってきた。それらの実践の意義をより深く理解するため、2020 年度には 5 つの団体が行った芸術文化事業を通して、参加者の気持ちや考え、態度がどのように変わったかを検討する複数の調査を実施した。

各団体の事業目的の調査

まず、2020 年度の公募で採択された 5 団体の代表者に本年度のプロジェクトの目的、内容、実施計画等を尋ねるインタビューを実施した。そして、各団体が芸術文化実践を通して参加者のどのような気持ち・考え・行動の変化をねらいとしているかを検討した。全ての団体の実践目的を分析した結果、各団体の実践は（1）芸術実践を通して触発（インスピレーション）体験の促進、(2）芸術活動へのモチベーションの促進、(3）自尊感情を高めること、(4）共同体感覚の生成、(5）コミュニティ意識の向上という 5 つの実践目標のいずれかを含むことがわかった (Table 1)。

芸術文化事業の意義を確認するアンケートの作成　芸術や創造性に関する心理学の知見を踏まえて、先述した 6 つの実践目的を評価する心理尺度（芸術文化事業の参加者アンケート）を作成した。さらに、横浜市民 300 名を対象とした調査[*1]を通して、心理尺度として十分な信頼性・妥当性があることを確認した（αs= .80）[*2]。

各団体の事業参加者のアンケート結果

各団体の各事業で芸術文化事業の参加者アンケートを配布し、各事業後の目的を踏まえて参加者の反応を検討した。各事業の各実践参加者の反応が、横浜市民 (N=300) のアンケートの各実践目標の項目平均値を基準値としたときに、その値よりも高かったかどうかを検討し、高かった場合にそのプログラムの意義を示す項目とした。なお、ヒューマンフェローシップのミュージカルアクトについては、参加人数から統計的分析が適用できなかった。Table1 は各事業・プログラムの目的と意義が確認された項目を示す。Table1 に示す結果から、2020年度 YokohamArtLife で実施された事業では、参加者の触発体験や芸術へのモチベーション、共同体感覚・コミュニティ意識を高めるという点で横浜市民のアートライフを豊かにしていたと言える。

Table 1. 各事業のプログラム目的と意義が確認された項目

主催団体名	プロジェクト名	参加人数	事業ごとの目的と意義が確認された項目				
			（1）	（2）	（3）	（4）	（5）
NPO法人ヒューマンフェローシップ	M6 Musical ACT 発表会	91名	○	○		○	○
	M6 Musical ACT レッスン	6名	-	-	-	-	-
STGK Inc.	左近山アトリエ131110	15名	○	○	○	○	○
	左近山散歩フェスティバル！	139名	○	○		○	○
NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル	PHOTO CABIN	127名	○	○		○	○
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会	YOKOHAMA AIR ACT	76名	○	○		○	○
(株)横浜メディアアド	テアトル図書館へようこそ！	67名	○	○	○	○	○

注）色付きの部分は事業の主催者が事業計画時の目的と関連の高い項目を示す。（1）触発の促進、（2）芸術活動へのモチベーションの促進、（3）自尊感情の向上、（4）共同体感覚の生成、（5）コミュニティ意識の向上を示す。○はアンケートの結果、各項目に関する意義が確認された項目を示す。（※アンケートと参加者数は、2021年1月31日までの実施プログラムを対象とする）

各事業の実施過程の質的分析

一部事業において追加の質的検討（参加者へのインタビュー、事業内の映像記録･分析など）を行った。結果として、スタッフの働きかけが参加者に企図通りの効果をもたらす過程が見られた他に、実施者が直接関与していない場面でも、プロジェクトが参加者同士のアート活動を媒体とする自己創発的な相互作用を支える場として機能し、他種の活動では得難い特有の他者と関わり合う経験を参加者にもたらしている様子が観察された。

[*1] 「芸術文化事業の参加者アンケート」のための予備調査
調査対象：横浜市民 300 名（調査パネルの中からランダム抽出）
調査日：2021/2/4
調査委託会社：楽天インサイト株式会社

[*2] α係数 - 心理尺度の内的整合性を示す係数

YokohamArtLifeの仕組み

2019年度　2020年度　通年

大学研究室・アドバイザー

岡田猛研究室（東京大学大学院教育学研究科）
中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）
落合千華（ケイスリー株式会社）

・関係者会議での講義
・個別指標のアドバイス

実施団体の個別指標調査実施に伴う外部専門家

STGK Inc.
佐藤慎也（日本大学理工建築学科教授）
小泉瑛一（about your city 代表）
山下裕子（広場ニスト）

YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会
上野正也（神奈川大学工学部建築学科特別助教）

アドバイス
相談

東京大学大学院教育学研究科 岡田猛研究室

・心理学からのアンケートの集計 / 分析
・岡田猛研究室個別研究の実施 / 分析

評価支援
データ提供

採択団体（各活動の主催者）

STGK Inc.
NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル
NPO法人ヒューマンフェローシップ
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会
株式会社横浜メディアアド（2020年度）

・申請、面談、ヒアリング、報告、プログラム実施
・共通指標の実施、個別指標の実施、分析
・関係者会議への参加、中間報告会、報告会

研究依頼
研究結果
調査・分析・アドバイス

ケイスリー株式会社

・評価設計アドバイザー
・2019年度の共通指標作成 / 分析

評価支援
データ提供

委託
調査・分析・アドバイス

協働
支援

横浜市 / 横浜市芸術文化振興財団

・制度設計
・公募申請受付
・審査会の実施
・資金提供
・関係者会議の実施
・報告会の実施
・広報支援
・情報提供
・報告書の作成

審査委員 （外部パートナー）

芹沢高志（P3 art and environment 代表）
中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）
藤岡泰寛（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授）
菅原幸子（横浜能楽堂支配人）

・審査
・アドバイス

YokohamArtLife 事務局

結び ～ YokohamArtLife が開いた地域社会と芸術の可能性

本誌タイトルにある「リーディング（先導性）」には、様々な意味を込めています。この芸術創造特別支援事業は、横浜の都心部で行う「シンボル」と地域で行う「リーディング」の 2 軸を持っています。都心部は開発が進み、常に新しい “ 街の今 ” があります。一方で横浜の郊外部は、高齢化が進み、単身世帯が増え、人口が減少している地域もあり、これからの “ 街の未来 ” があります。前者を “ 成長 ” とするならば、後者は “ 成熟 ” です。2030 年の SDGs の達成に向けて世界は動いていますが、これからを「成熟の時代」と捉えた場合に、郊外で芸術文化活動に取り組むことは、いわば時代を先取りする先導的な役割になるので、このプログラムを「リーディング」と名付けました。YokohamArtLife（以下 YAL）という愛称は、「芸術をもっと身近に、もっと気軽に」という目標から「横浜、アート、ライフ」の単語のつながりをイメージしています。

YAL の各活動を通じて、横浜の地域と芸術の未来を見ることができました。新型コロナの時代では人々の移動が厳しく制限され、また人が密接な環境下で集まるのを避ける傾向にあり、都市部の劇場や音楽堂、美術館での芸術体験は減少しています。そうした中で、あらためて芸術や文化は生活に必要であり、住まいの身近な場所に芸術があることが、地域の魅力の一つ、生活の豊かさにつながることを再確認する機会になりました。

ただ、ここで一つ問いが生まれました。コロナ禍に関わらず、横浜において芸術体験の機会は平等だったのでしょうか？例えば、横浜の郊外部から都心部への移動を考えた場合、それを負担なくできる人には問題ないですが、高齢者や車いすで生活する人には、芸術を体験することへ “ 障害 ” があったのではないでしょうか。また、物理的な距離だけでなく、経済や情報の格差でそれが叶わないことも想像されます。このように考えると、地域の文化拠点の重要性や、芸術や文化を格差なく体験機会を “ 広げる ” ことへの課題が見えてきます。
また、芸術の体験を “ 深める ” 視点では、地域の人が気軽に訪れる場で実施することで、劇場や美術館に行くのと同様に触発性が高まり、想像力を喚起するかたちで心理に反映されるということが、今回行った各種調査から見えてきました。これは表現する側にとって、劇場や美術館のような専門的な機材やスタッフが無いという制約下での挑戦が、むしろ創造性を高め、新たな表現を生み出せる可能性を示しています。

仮に芸術が何か目的を持っていなかったとしても、芸術と社会が接続することで、また市民が芸術に触れることで、何らかの目的や目標が生まれます。そのとき、その作用を深く学ぶことでその目的や目標を達成していくのか、その作用の上辺だけを利用してそうするのかで、結果はだいぶ違うでしょう。
YAL の各活動では、様々な協働と横断が見られました。団地活性化と多様な価値観を認めあう居場所づくりによる「目的」の協働 、暗室と広場による「場」の協働 、アーティストと住民による「創作」の協働 、福祉側から芸術に取り組む領域の横断、図書館と区民文化センターによる「企画」の協働など。これらを見るに協働相手同士が「共通の問い」を立てられる活動では、芸術と社会の双方の可能性が広がっています。

芸術体験の格差をなくそうと考えることは、芸術を体験する意味を考えることでもあります。なぜ、芸術は社会に必要なのでしょうか。今回、YAL の各活動から多くを経験し学ぶことができましたが、ひとまずの結果として、地域の場、芸術の場で、様々な目的を持つ人のユニークな出会いが生まれることが見えてきました。街に芸術が浸透することで横浜各地ならではの文化となり、街も人も変化し成熟していきます。この報告書を通じて、各活動には様々な当事者がいて、その本質的な価値は当事者によって異なる、その様子が可視化されたことをご理解いただけましたら幸いです。

事務局：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 広報・ACY グループ

スケジュール

2019年度

公募期間

2019 年 5 月 16 日（木）～ 7 月 1 日（月）

説明会

1 回目 5 月 25 日（土）会場：市民フロアミーティングルーム A（横浜そごう 9 階）
2 回目 6 月　8 日（土）会場：戸塚区総合庁舎 3 階多目的スペース大 B）
3 回目 6 月 14 日（金）会場：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団会議室（産業貿易センター 9 階）

審査会

一次審査（書類審査）7 月 12 日（金）
二次審査プレゼンテーション（面談審査）7 月 22 日（月）
会場：産業貿易センタービル 8 階 横浜商工会議所 805 会議室

モニタリング会議（関係者会議）

第 1 回 8 月 23 日（金）/ 第 2 回 9 月 25 日（水）/ 第 3 回 10 月 15 日（火）・10 月 18 日（金）
第 4 回 12 月 11 日（水）/ 第 5 回 2020 年 2 月 19 日（水）

報告会

2020 年 3 月 13 日（金）

2020年度

公募期間

2020 年 4 月 17 日（金）～ 6 月 1 日（月）

審査会

一次審査（書類審査）6 月 17 日（水）
二次審査プレゼンテーション（面談審査）6 月 26 日（金）

面談

7 月 17 日、20 日、22 日 各団体と個別の第 1 回面談を実施

YAL ルーム（関係者会議）

第 1 回　7 月 28 日（火）岡田猛研究室 芸術プロジェクトの評価について：心理学の視点から
第 2 回　8 月　4 日（火）中村美亜先生 評価についてレクチャーとブレスト
第 3 回　8 月 18 日（火）落合千華さん 各団体の個別指標策定（グループワーク）
第 4 回 11 月 24 日（火）中間報告会
第 5 回 2021 年 1 月 20 日（水）個別指標に関する座談会

報告会

2021 年 3 月 19 日（金）

公募概要

対象

横浜ならではの芸術文化体験を生み出すプロジェクトであり、特に先進的、もしくは将来的に地域への定着を狙った実験的なプロジェクトを支援。地域の方々に芸術文化体験を提供する内容であることが必須。プロジェクトの内容、形態は自由。法人、または法人が代表となる実行委員会（実施（申請）法人の所在地は、市内・市外を問わない ）。

提案内容

多様化する社会の中で、あらゆる市民が芸術文化活動に参加できるようにしていくための戦略的なプロジェクト。①「何かしらの理由で芸術文化に触れたくても触れることが難しい人」、②「芸術文化に関心がなく芸術文化に触れていない人」がいることを想定し、その方々に芸術文化に触れやすい環境の形成（会場、料金、内容等）、また、情報発信方法や多様な参加動機を生み出す工夫や、新型コロナウイルスに対応した会場選定や実施方法、社会への提案など有効な取り組みであるかどうかが求められる。

想定会場

横浜市内にある広場、公園、学校、歴史的建造物等、地域に住む方の身近に存在する地域ランドマーク*を実施会場として想定している。既に文化施設や芸術祭等のプログラムが充実している横浜市内の都心臨海部は会場として想定していません。

*地域ランドマークとは？
地域の人が愛着を持ち、誇りに感じ、多様性を包摂する場のこと。具体的には、屋外公共空間、屋内公共施設、商店街、歴史的建造物など。

2019年度から2020年度の要項などの変更

- 実施期間を 2 ヶ月延長
  実施期間を延長することで長く活動することができ、充実したプログラムが実施できるようにする。
  （対象期間を 2019 年 9 月から翌年 1 月末日までの原則 5 ヶ月から、2020 年 8 月から翌年 2 月末日までの原則 7 ヶ月に変更）

- 選考基準に「同時代性」を追加
  新型コロナウイルスに対応した会場選定や実施方法、社会への提案など有効な取り組みであるかどうか提案を受ける。

- 「実施会場加点」を追加
  事業の趣旨に則り、横浜市の文化芸術拠点（市内文化施設および創造界隈拠点）の設置状況を鑑みて、会場選定に応じて加点する。この加点により、文化芸術拠点が少ない郊外部への選定が増える。

- 開催支援に係る助成金の支払について
  新型コロナウイルスを踏まえた社会環境を鑑み、支払い手続きの見直しを図り、希望団体から支援金の前払いの申請を受けた場合、支援申請金額の最大 80％の前払いを行えるように変更する。

各プロジェクトの主催・共催・協力等

左近山アートフェスティバル！ / 主催：（株）スタジオ・ゲンクマガイ（STGK Inc.）/ 2020年度協力：UR 都市機構東日本賃貸住宅本部神奈川エリア経営部、UR コミュニティ横浜住まいセンター、左近山団地 1 街区自治会、左近山ショッピングセンター、sixinch JAPAN(ファニチャー協力）

PHOTO CABIN / 主催：NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル / 2019年度協力：(有) ケイ・フォトサービス、（株）エルブスタイル、神奈川案内広告（株）/ 2020 年度共催：玄海田公園、Crew by KPS / 2020年度協力：（株）横浜国際平和会議場、ローズホテル横浜、オーガスタミルクファーム、横浜市立金沢動物園、三井アウトレットパーク横浜ベイサイド、横浜ベイサイドマリーナ（株）

YOKOHAMA AIR ACT / 主催：YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会 / 2019年度協力：並木クリニック、並木コミュニティハウス、ミハマ通商（株）、横浜金沢シーサイドエリアマネジメント協議会、石井造園（株）、（株）横浜シーサイドライン、tmsd 萬田隆構造設計事務所、建築設計加藤住吉一級建築士事務所、一級建築士事務所スタジオ・デンデン / 2019年度協賛：シンロイヒ（株）/ 2020年度共催：横浜金沢シーサイドエリアマネジメント協議会 / 2020年度協力：金沢シーサイドタウン連合自治会、金沢センターシーサイド名店会、富岡並木ふなだまりgionbune公園愛護会、独立行政法人都市再生機構神奈川エリア経営部、（株）東京ベイガード

M6 Musical ACT / 主催：NPO 法人ヒューマンフェローシップ / 2019 年度協力：日韓若者フォーラム準備委員会、ソウル文化財団、財団法人青年財団 / 2020年度協力：ブランチ横浜南部市場、環境・災害 NPO 法人グリーンパワーファクトリー / 2020年度助成：2020年度 日本郵便年賀寄付金配分事業

テアトル図書館へようこそ！（2020年度のみ開催）/ 主催：（株）横浜メディアアド / 共催：横浜市立図書館

気軽に読んでいただくことを目的に作成した本報告書には、調査記録の詳細を掲載しておりません。さらに詳しく YokohamArtLife の調査結果について知りたい方は、こちらのリンクにアクセスし、WEB からダウンロードしてください。

YokohamArtLife 2019-2020年度 調査結果
https://acy.yafjp.org/news/2021/58470/

芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム YokohamArtLife（ヨコハマートライフ）

YokohamArtLife にご参加くださったご来場者様、各活動の主催者・アーティスト・関係者の皆様、審査や研究、編集をしてくださった専門家の方々へ厚く御礼申し上げます。

事務局：横浜市、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

審査員：芹沢高志（P3 art and environment 代表）
中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院 准教授）
藤岡泰寛（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授）
菅原幸子（横浜能楽堂支配人）

2019年度評価設計アドバイザー：ケイスリー株式会社

2020年度研究委託：東京大学大学院教育学研究科 岡田猛研究室
研究責任者：岡田猛（東京大学大学院教育学研究科教授）
調査担当者：縣拓充（東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門高等教育開発室助教）
調査担当者：石黒千晶（金沢工業大学情報フロンティア学部心理科学科助教）
調査担当者：松本一樹（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

調査サポート：山本玲子

アートディレクション：有限会社 スタジオニブロール
ロゴタイプデザイン：有限会社 天野和俊デザイン事務所

報告書

発行日：2021年 3 月 31 日
発行：横浜市、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
企画：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 広報・ACYグループ
編集：株式会社セオ商事
アートディレクション：鈴木佐知子
デザイン：今井祐里
印刷：株式会社協進印刷
協力：東京大学大学院教育学研究科 岡田猛研究室、落合千華（ケイスリー株式会社）、中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院 准教授）、株式会社スタジオ・ゲンクマガイ（STGK Inc.）、NPO法人 ザ・ダークルーム・インターナショナル、NPO法人ヒューマンフェローシップ、YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会、株式会社横浜メディアアド

アートはぼくらのそばにある

ヨコハマアートライフ・芸術創造特別支援事業

OPEN YOKOHAMA

Yokohama Arts Foundation